

平成30年～33年度 文部科学省研究開発学校指定

平成30年度研究開発実施報告書 (第1年次)

価値の創出と受容・評価をコアにした教科融合カリキュラム
に関する研究開発

～「創る科」の創設を通して～

平成31年3月

山口大学教育学部附属山口小学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第 55 条の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指定を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読みください。

平成31年3月 印刷・発行

平成30年度研究開発実施報告書

発行者 山口大学教育学部附属山口小学校

〒753-0070

山口県山口市白石3-1-1

Tel (083)933-5950 (代)

印刷所

目 次

平成30年度 研究開発実施報告書（要約）

1	研究開発課題	1
2	研究開発の概要	1
3	研究開発の経緯	1
4	研究開発の内容	2
	（1）研究仮説	
	（2）教育課程の編成	
	（3）新教科「創る科」について	
	（4）その他	
5	研究開発の結果及びその分析	8
	（1）実施の効果	
	（2）指導方法等は適切であったのか	
6	今後の研究開発の方向	9
別紙1	教育課程表	11
別紙2	学校等の概要	12

目 次

平成30年度 研究開発実施報告書

1 研究開発の概要	13
2 研究開発の経緯	13
4 研究開発の内容	16
(1) 研究仮説	
(2) 教育課程の編成	
(3) 新教科「創る科」について	
(3) その他	
5 研究開発の結果及びその分析	31
(1) 実施の効果	
(2) 指導方法等は適切であったのか	
6 今後の研究開発の方向	33
指導案	35
資料1 前期と後期の学校時程比較（詳細）	47
資料2 教科で育成する力に関するアンケート用紙（因子分析）	49
運営指導委員，研究支援委員，本校教員，研究協力員	50

35	山口大学教育学部附属山口小学校	30～33
----	-----------------	-------

平成30年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

価値の創出と受容・評価をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究開発
～「創る科」の創設を通して～

2 研究開発の概要

新たな価値の創出と受容・評価に関する力は、これから生きる子供たちに必要なものであり、全ての教科、学習活動を通じて育成すべきものである。本研究では、その基盤であり、かつ中核をなす教科としての「創る科」を設置し、これが各教科等及び学校種間のカリキュラム融合に果たす機能や教育的意義について検証を行う。新教科「創る科」の設置に当たっては、教育課程全体より必要な時間数を確保する。

創造的な思考や態度は、AIが進展する中で人間が優位性を発揮できる重要な領域と考えられる。「互いが創り出す価値を認め、考え協働する」ことによって、新たな時代を生き抜くのに必要な常識に捉われない見方や発想を育てるだけでなく、より実践的な人権教育、道徳教育にも寄与できると考えられる。そのための教育的価値の確立を目指し、本研究において、その学習内容の編成と意義を明らかにする。

3 研究開発の経緯

研究にあたっては、本校研究部が中核となって全体計画の立案・実施を進めるとともに、山口大学教育学部並びに教職大学院教員の協力による研究支援委員会を構成し、専門的な観点からの協力を得るようにした。

実施内容等
<p>◇研究支援委員会</p> <p>授業研究や内容評価に関わる専門的な支援を受けるため、山口大学教育学部並びに教職大学院に働きかけて、研究支援委員会を立ち上げた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回 6月27日（水）14:30～16:00 場所：教育学部22番教室 内容：研究開発校に関する情報共有と研究内容に関する質疑。 ・第2回 7月25日（水）14:30～16:00 場所：教育学部22番教室 内容：附属山口小学校研究部教員が参加し、研究内容に関する質疑と今後の展望に関する共有。 ・第3回 10月4日（水）17:50～19:30 場所：教育学部附属山口小学校会議室 内容：既存教科に関する意識調査の分析結果と質疑と、「創る科」で育成すべき力や指導方法に関する検討。 ・第4回 12月4日（火）11:50～13:30 場所：教育学部第3会議室 内容：「創る科」の内容と学習形態について質疑、提案。 <p>◇「創る科」に関わる校内研修</p> <p>基本的に校内研修として実施し、全教員が参加（主なもののみ記載）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修22 7月19日（木）16:00～17:00 内容：「創る科」の考え方や取り組み方について研究部による提案と質疑。

- ・研修23 7月24日（火）9：45～10：45
内容：「創る科」で表出される資質・能力について共通する事項を検討。
 - ・研修29 8月27日（月）16：05～17：05
内容：研究の進め方および各教科で身につける力に関する調査実施。
 - ・研修39 11月15日（木）14：40～16：10
内容：「創る科」研究の進め方について研究部提案。
 - ・研修40 11月22日（木）14：40～16：10
内容：研究授業の実施方法に関する協議。
 - ・研修46 12月6日（木）8：05～17：00
内容：「創る科」授業の実施と授業検討。上智大学教授 奈須正裕 氏による指導助言ならびに講話。
 - ・研修50・51 12月25日（火）・26日（水）8：05～11：15
内容：「創る科」の指導案検討。
 - ・研修52 12月27日（木）13：00～17：00
内容：授業記録を基にした授業検討。文部科学省教科調査官 浅見哲也 氏による指導助言ならびに講話。
- ◇公開研究発表会 平成31年1月25日（金） 12：30～16：35
内容：研究概要紹介，公開授業（6授業）実施。
鼎談（上智大学教授 奈須正裕 氏，国立教育政策研究所総括研究官 福本徹 氏，附属山口小校長 岡村吉永）。
- ◇運営指導委員会
- ・第1回 平成31年1月25日（金）10：30～11：30
内容：研究開発校（1年次）の取り組みに対する助言，指導
- ◇カリキュラムおよび学校時程の見直し，保護者対応
- ・PTA総会 平成30年5月10日（木）
内容：研究開発学校の指定に関する報告と協力について
 - ・カリマネ・タイムの実施 平成30年7月18日～7月25日
内容：「創る科」の授業時数確保等の検討の中で，学校時程を見直す。
 - ・臨時PTA総会 平成30年6月16日（土）
内容：9月より，学校時程の変更することについて説明し，了承を得る。

4 研究開発の内容

（1）研究仮説

本研究開発では，創造的な思考や態度は，慎重に計画された教育活動を通じて段階的かつ着実に育成できるものであり，その教育は，学校における全ての教育活動において，その理念を共有して行われるべきものであるとの仮説に立脚する。こうした教育活動を意図的に行うために新教科「創る科」を創設し，価値の創出を通して自分らしい考え方や挑戦する態度を育成し，価値の受容を通して対立やジレンマを克服する力を，さらに価値の評価において公正・公平な見方や責任ある行動を取れる力を育成するよう，教育課程を設定する。

研究初年度である今回は、研究の蓄積ならびに実践面での蓄積が十分でないことを考慮し、既存各教科の授業数減が教育課程に影響を生じないように、優先的に研究支援委員会や校内研修の場を整備した。「創る科」の授業は、10月以降に実践し、現時点において、教育課程への支障は生じていない。また、「創る科」としての授業実践時数は、実践がやや後半にずれ込んだにもかかわらず、当初計画を上回っており、順調に実施できたと考える。

一方、「創る科」の内容構成については、指導方法や教材に関する検討が不十分で、具体的な指導コンテンツも不足している。特に、創る学びのスパイラルとして挙げた幼児から中学生に至るまでの学びのプロセス(図1)については、その妥当性や要素間の関係性、既存教科との関わり等の検討が進んでおらず、「創る科」として実施した授業の位置づけが曖昧となっている。次年度、重点的に取り組む必要がある。

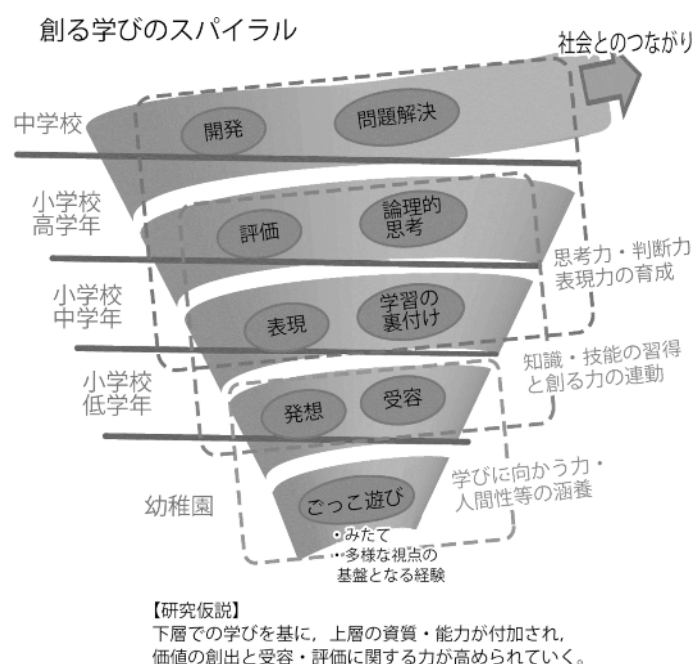


図1 「創る科」で想定する学びのスパイラル

(2) 教育課程の編成

① 「創る科」を軸とした教科融合カリキュラムの考え方

価値の創出と受容・評価をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究を実施するにあたって、本研究では、その軸に「創る科」を置くことで、より円滑かつ有機的な実現が図れるという仮説をたて、授業形態等の取組を試行した。「創る科」を軸とする各教科の融合のイメージを図2に示す。

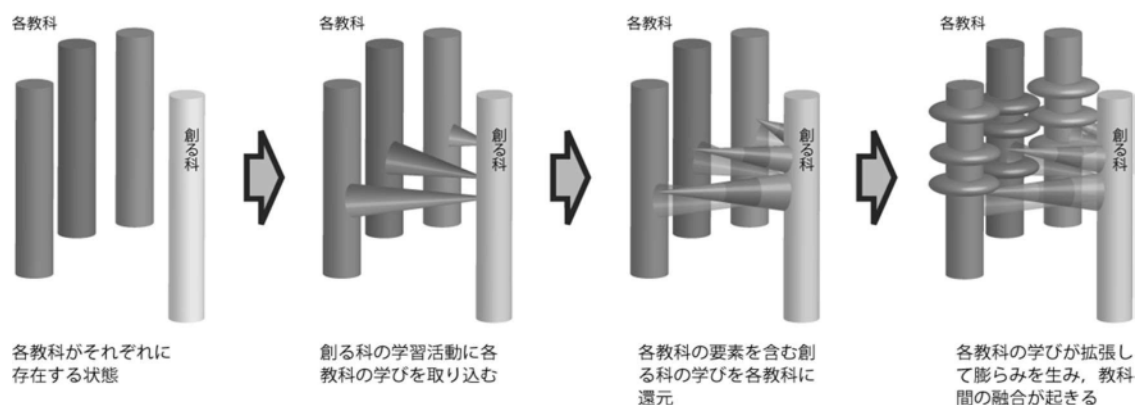


図2 「創る科」を軸とした各教科の融合に関するイメージ

② 教育課程の特例

本年度は、現行の学習指導要領に示された総授業時数の実施をもって全課程の修了とした。新教科「創る科」の授業時数については、道徳科や総合的な学習の時間など、既存の教科から時数を捻出するとともに、これまで授業として扱ってこなかった朝のフリースクール(毎日15分)の一部を「創る科」とすることで確保した。授業内容に合わせて授業時間

を弾力的に設定することは、学び方の改善だけでなく、過密な学校時程を解消する上でも効果のある実践だと考える。なお、「創る科」の授業時数は、研究1年次であることを踏まえ、当初、各学年とも10時間の実施を目標とした。

③ 学校時程の見直し

研究開発学校として先行する福岡教育大学附属福岡小学校では、各教科や学年で重複していた指導内容を見直し、融合的なカリキュラムを実施することでカリキュラムを縮減し、週当たりの授業時数を削減することに成功している。本校においても、上述した「創る科」を軸とする教科融合カリキュラムを検討する中で、総授業時数を下回らない範囲で授業時数縮減が可能と判断し、年度後半（夏休み明けの9月）より週当たりの授業数を減じる学校時程を試行した。具体的には、図3のように、水・木曜日の午後は、全学年で授業を行わず、その他の曜日についても下校時間を40分早めている。

こうした学校時程の変更が可能となった要因としては、従来から本校が行っているフリースクールと呼ぶ朝の会中に行う15分間の話し合い活動を見直し、一部を「創る科」の授業としたことに加え、年間の授業時数に占める余剰分を見直したことがあげられる。悪天候による休校や学級閉鎖等の不測の事態に備え、授業時数に余裕を持たせることは必要であるが、見直す

ことによって、それが過剰であったことを気付かされた。ただし、この取り組みは当初計画になかったものであり、目的や効果を検証する準備がなかった点は猛省が必要である。学校時程については、次年度に向けて再度見直す計画であり、教育課程に対応した学校時程の在り方を研究の一部として取り組んで行きたい。

年度前半 学校時程		学年						学年						学年						学年											
		1		2		3		1		2		3		1		2		3		1		2		3		1		2		3	
		月						火						水						木						金					
登校	800																														
朝の会	805-825																														
1校時	830-915																														
2校時4M	925-1025																														
中間休	1025-1040																														
3校時	1040-1125																														
4校時	1135-1220																														
給食	1220-1300																														
昼休	1300-1340																														
掃除	1340-1355																														
着替	1355-1405																														
5校時	1405-1450																									1450-1505 帰りの会					
6校時	1500-1545																									1505 下校					
帰りの会	1545-1600																														
下校	1600																														

年度後半 学校時程		学年						学年						学年						学年											
		1		2		3		1		2		3		1		2		3		1		2		3		1		2		3	
		月						火						水						木						金					
登校	800																														
朝の会	805-825																														
1校時	830-915																														
2校時3M	925-1010																														
中間休	1010-1025																														
3校時	1025-1110																														
4校時	1120-1205																														
給食	1205-1245																														
昼休	1245-1315																														
掃除	1315-1325																														
着替	1325-1335																														
5校時	1335-1420																									1335-1350 学活1M					
6校時	1430-1515																									1350-1355 帰りの会					
帰りの会	1515-1520																									1355 下校					
下校	1520																														

図3 学校時程の見直し

④ 次年度の研究に向けた気付き

「創る科」を柱に置いて各教科の内容を見直したことや教科融合型学習を行ったことで、各教科の特質や構成がより明確化されることに気付いた。すなわち、より深い学びのためには、各教科の見方、考え方に沿った教科ならではの概念に触れることが重要であり、それには過剰な内容を削ぎ落として、教科本来の輪郭を見えやすくすることが求められる。次年度以降、教科融合カリキュラムに関する研究として、この仮説を基に既存教科の時数を含めた教育課程全体の見直しに着手したい。

(3) 新教科「創る科」について

① 目標

多様で持続的な社会を形成する主体者としての見方・考え方を働かせ、横断的・創造的な学習を通して、新たな価値の創出、受容・評価が適切に行えるための資質・能力を次の通り育成することを旨とする。

- (1) 学んだことや経験を基に発展的に考えることや、物事の本質を多角的に捉え直すことで、価値の創出や発見が行えるようにする。
- (2) 人との関わりの中で思考力や想像力を高め、新たな価値を適切に受容・評価し、伝え合うための力を養う。
- (3) 学びや生活の中で生まれる価値の意味に気付くとともに、進んで価値の創出と受容・評価を行えるよう、その能力の向上を図る態度を養う。

② 「創る科」の内容構成

新設する「創る科」の内容は、以下のA及びBで構成する。

A 価値の創出に関すること

- (1) さまざまな課題を、創造的な思考や態度で対処すること。
- (2) 学んだことを基に考えたり、工夫の中に生かしたりすること。
- (3) ことばや絵などを用いて、「思いつき」を他者に伝達すること。
- (4) 他者と協働することなどを通して、「思いつき」を形にすること。

B 価値の受容・評価に関すること

- (1) 自他のアイデアやアプローチを比較し、その違いや良さを伝え合うこと。
- (2) 多様な視点から課題を捉え、改善の方策等を具体的に示すこと。
- (3) 身近な物などに潜む先人の工夫や観点到に気付くこと。
- (4) 新しい考えや事物を受け入れ、自分の活動に反映すること。
- (5) 既存の価値や方法の改善、見直しに関わること。

「創る科」における評価は、その特質が生かされるよう上記の内容を踏まえて、活動や学習の過程、報告書や作品、発表や討論などに見られる学習の状況や成果などを対象とする。評価の観点としては、主に創造的な思考の基礎となる「知識・技能」、その表現や評価に関わる「思考力・判断力・表現力等」、主に創造的な態度や価値の受容に関わる「学びに向かう力・人間性等」について内容項目を整理し、観察および成果物等を基に実施する。

③ 創る科と他教科との関連

新教科「創る科」の性格や位置づけを明確にするための資料を得ることを目的に、各教科（創る科を除く）で学習させたい力とはどのようなものかを本校教員に調査した。調査は、質問紙調査とし、教科ごとに、示された項目内容がどの程度学習に必要なかを1～6の6件法で回答するようにした。項目内容は、図4に示す、認知的能力に関するもの24項目、非認知的能力に関するもの11項目で構成し、支援委員会のメンバーである大学教員の力を借りて因子分析を行った。

まず認知的能力因子は、5つの因子に整理され、分類された項目内容から因子1を言葉にする力、因子2を見極める力、因子3を捉える力、因子4を試行錯誤する力、因子5を開発する力と命名した。各因子と教科との関係は、その右に示す表のとおりである。

なお、ここで分類されなかった内容項目（太線で囲んだ因子が99となっているもの）

をみると、妥当性を探る力や選択・判断する力、気付く力といった学びを支える基盤的な力であることに気付く。こうした項目は決して重要度が低いわけではなく、各教科で重視する学びの中で、相対的に重要度が低くなったと捉えるべきであろう。教科融合型カリキュラムの軸である「創る科」においては、こうした学びを支える基盤、すなわち「学びを進める力」を教科の特質としてより積極的に取り扱っていくことが考えられる。

非認知的能力因子については、図4下図に示す結果で、因子1を人とうまくやる力、因子2をおもしろいと感じる力と命名した。右の教科との関わりをみると、非認知的能力については、いわゆる実技系教科や道徳に関与が深いとみられていることが分かる。

今後本研究では、5つの認知的能力因子に学びを進める力を加えた6つの認知的能力因子、ならびに2つの非認知的能力因子を意識した指導を全ての教科で進めて行く計画である。

認知的能力因子と教科の関係



非認知的能力因子と教科の関係

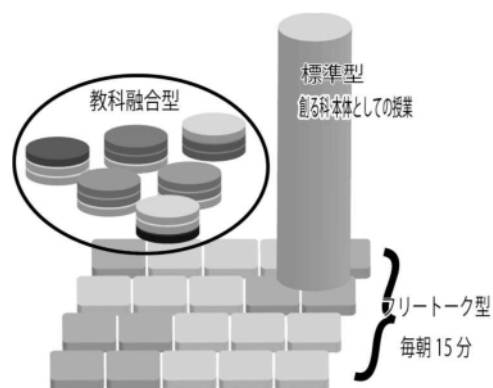


図4 教科の学習に必要な力に関する因子分析（教員の意識）

④ 「創る科」の授業形態

新教科「創る科」では、子供の創造的な思考や態度が育成されるよう指導内容や場面に合わせた授業形態をとるようにした。本年度実施した形態は三つで、図5にそのイメージを示す。インターバルを取りながらより多角的、協働的に思考するため、継続的に毎朝15分間の話し合い活動を実施するものを『フリートーク型』、教科融合型の学習によって多様な見方、考え方の獲得を目指すものを『教科融合型』、創造的かつ実践的な活動を通して価値の創出と受容・評価について学ぶものを『標準型』とする（各授業形態の名称は、試行段階の仮称であり、研究を推進する中で適切に定めていく）。なお、一つの授業が並行して三つの授業形態を取ることは、学校時程の柔軟な運用等の利点がある一方で、分かりにくさがあるのも事実である。今後の研究を通して各授業形態の特性や相互の

関係性や効果を明らかにするとともに、「創る科」という教科からみた意義を明らかにしていきたい。その際、三つの授業形態が必ず必要となるのか、あるいは特定の授業形態や組み合わせでどのような効果が生じるのかについても検証したい。



⑤ 「創る科」の年間指導計画

研究1年目であることや年間の指導時間を10時間（実施目標）と少なく設定していることなどから、今年度は「創る科」の年間指導計画は立てることはせず、図6に示す「創る科」初年度タイムラインに沿って授業ならびに研究を進めることとした。年度前半は、カリキュラム検討等の校内研修を通して、「創る科」とはどのような教科で何を指すのかといった理解の醸成ならびに研究開発に関わる意義について理解を深めることに重点を置いた。これと並行する形で「創る科」の授業準備を進め、実際の授業は、年度後半から実施することとした。

図5 「創る科」の三つの授業形態

また年度前半では、充実した研究を実施するための環境整備にも努め、山口大学教育学部ならびに教職大学院との連携を図り、研究支援委員会を立ち上げ、協働による研修会も開催した。さらに、保護者らに対し、本校が研究開発に取り組む意義や子供に与える影響を理解してもらうため、PTA総会等を通じて説明する機会を設けるようにした。

年度後半では、各学年とも年間10時間を目標に「創る科」の授業を試行し、その成果をもとに平成31年1月25日に研究発表会を実施した。

なお、9月初頭に計画していた第1回目の運営指導委員会については、実質的に「創る科」の授業を実施する前で、協議に必要な資料が十分でないことから今年度は開催を見送った。代替として、数回に分けて授業研修会を開催し、その中で適宜指導・助言を受けるようにした。

(4) その他

本校では、平成33年度を目途に附属幼稚園、附属中学校との幼小中一貫教育（分離型）を目指した作業を同時進行で進めている。この中で、一貫教育カリキュラムの軸をどのよ

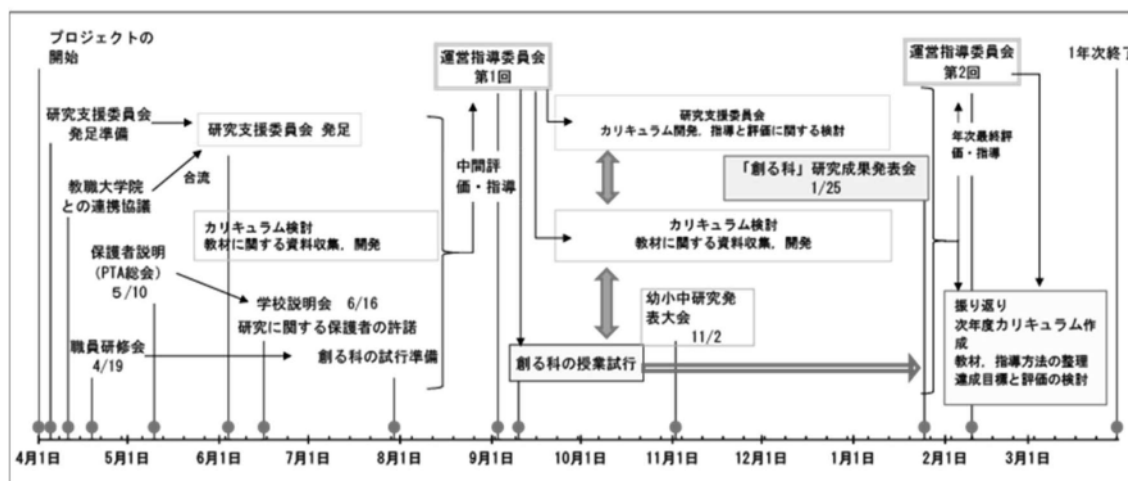


図6 「創る科」初年度タイムライン

うにするかが検討されており、小学校では「創る科」をその候補としている。校種間の接続も視野に入れつつ、今後の研究開発を進めていきたい。

5 研究開発の結果及びその分析

(1) 実施の効果

① 児童・生徒への効果

研究を開始したばかりであり、授業についても部分的な実施に留まることから、現時点で子供への効果を明確にすることは難しい。ただし、授業後に記述された振り返りをみると、子供なりに「創る科」の学びが意図するものを汲み取っており、教科融合型カリキュラムや「創る科」の可能性を期待することができた。以下、「創る科」の授業後に書かれた振り返りの一部を紹介する。授業は5年生に実施した標準型授業(45分)で、「工夫して、円形の紙コースターの中心をもとめる」というものである。これまでの学びや経験を生かすことに気付いたり、子供同士が互いの考えを受け入れ学びを創っていこうとしたりする様子が伺われる。

【子供の振り返り(抜粋)】

- 1つのアイデアをもとに、ほかの折り方はないかななど考えながら見つけると、頭の中にいろいろな発想が出てきて楽しかったです。習ったことも生かしながら授業と授業をつなげながらできました。
- と中でわからなくなってしまうても、そこから発見につながるということに気付いた。今までの知識は色々なことにつながると思った。
- 直角や長さ、今まで習ってきた勉強が生かされた。
- 円の中心を探すには、直径と半径がある。
- 少し難しく考えすぎているのだと思いました。今度やるときは、友達の考えも使いたいです。
- あたらしいやり方を見つけられなかったけど、みんなのやり方をきくと、分かってうれしかったです。
- むずかしく考え込みすぎている。でも意外と身の周りにあるものを生かして、考えられるものが多かった。
- このようなことをすることで創造力がみについたり、楽しい方法でいろいろなことがみについたから、ほかのことにも生かしたいです。
- こうやったらできるかもと思ってやってみたことで、中心が分かったときに達成感を感じました。
- 色いろなことに気づけたから、またやりたい。

(以上)

授業とは別に、本研究の仮説に基づいて、児童が学習を生かした思考を働かせたり、周囲の事物への関心を高めたりする工夫も試行した。給食調理室へ続く廊下に貼りだした問題では、算数や理科等で学習したことの意味に気付き、多角的に考えることやよく観察することの大事さに気付く児童の様子が少しずつ見られるようになってきた。教育課程の中で「創る科」がしっかりと機能を果たすことで、一層の効果が期待される。

② 教師への効果

研究開発に参加する中で、教育政策や学習指導要領の趣旨に関心を向ける教員が増加した。新教科「創る科」にどう取り組むか考えながら、各教科の指導に取り組むことを通し

て、結果として教科の特質やそこで何を学ぶのかが明確に意識されつつある。

学校時程の変更は、働き方に対する教員の意識に影響を与え、附属学校の課題であった深夜まで居残る教員の姿は、明らかに減りつつある。新教科を導入することでカリキュラムが肥大化し仕事が増えるのではなく、結果として全体がスリム化されるべきという共通の意識を持てたことは、今年度の大きな成果である。

③ 保護者等への効果

附属学校の性格上、学校が研究開発に取り組むことへの保護者の期待感が高い。一方で、学校時程の見直し等、具体的な変化に対して不安を強く抱く保護者も一定数存在し、機会を捉えて丁寧な説明を行うことが必要となっている。

これに関しては、平成31年1月25日に開催した研究発表会の一部を保護者に開放し、外部講師の講演等を通じて、異なる観点から学校の取組を理解してもらう機会を試行した。参加した保護者からは、「学校の取組に不安を感じていたが、ぜひ応援したい」といった声が聞かれ、対応した教員からも、もっと機会を増やすべきだという積極的な意見が出されている。保護者の意識が、子供の在学中だけでなく、社会の急速な変化に目を向け、その後の将来を見据えた教育の必要性に向き始めたことは重要であり、保護者対象の調査等によってその意識変化等も明らかにしたい。

(2) 指導方法等は適切であったのか

研究初年度で、指導方法等が適切か否かを判断するには十分な資料が得られていないため、上述した授業の3形態を対象に試行を振り返る。

従来、本校が実施してきたフリートークについては、子供の協働性や意見表出能力の向上に効果があるとされる一方、話し合いに方向性がなく一回一回の「言いつ放し」になっているとの指摘も受けてきた。お茶の水女子大学附属小学校では、『てつがく』することを「既知と捉えている事象や概念の意味や価値などに対して“問い”をもち(中略)、自らの考えを広げたり深めたりしていくこと」と捉えているが、今回フリートークを「創る科」の授業として探究の方向性や継続性を持たせることで、同様の効果が伺われる場面をみることができた。先行研究などを参考に、今後「創る科」の主題である価値に迫る『フリートーク型』授業の在り方ならびにその効果に迫りたい。

『教科融合型』授業については、複数の教科に共通する学習内容や題材を「創る科」の授業として実施することで、単なるオムニバスに陥らない指導や学びの深まりが意識されるようになってきたと感じる。これについては、先行する福岡教育大学附属福岡小学校の学習指導要領案試案を参考に、本校の特徴である「創る科」を軸にすることの意味や効果、課題を今後明らかにしていきたい。

「創る科」の柱となる『標準型』授業については、限られた学習時間や環境の中で、価値の創出と受容・評価が行えることが必要であり、どのような教材を通して目指す力を身につけさせるかが重要な研究課題となる。また、この授業形態については、子供のコンピテンシーを高めるための優良なコンテンツが不可欠であるが、現在はこれが圧倒的に不足している。これについては、企業研修や各種自己啓発なども参考にしながら、学校教育として適切なものを開発、収集していく必要がある。

6 今後の研究開発の方向

今後の研究開発の方向としては、「創る科」をコアとした各教科の融合、あるいは幼稚園教育から発して中学校段階までを想定した「創る科」の学びのイメージを基に、カリキュラムや

学習内容を具体化し、その効果等を明らかにすることがあげられる。特にカリキュラムに関しては、既存の各教科の内容構成を見直すとともに、「創る科」との関わりを意識しながら、授業時数を含めた全体的な検討を進めたい。

また、「創る科」の創設を軸に「価値」を問う中で、価値とは単に新しい発想や発見ばかりでなく、何を学ぶべきなのか、どうなったら学んだといえるのか、どう学んだことを生かすのかといった、学ぶ価値を追求していく姿勢が重要であることも気付かされた。学びを振り返り、自覚化させていく中で、最終的にどのような力が育成されるべきなのか、そのためにふさわしい教材や評価を明らかにしていくことも求められる。

以下、今後の研究計画およびその評価方法について、概要を整理する。

【研究計画及び評価方法】

<p>第 2 年 次</p>	<p><計画>○「創る科」を軸とした教科融合型カリキュラムを作成し、その効果や課題を検討する。その際、「創る科」で想定する学びのスパイラルを意識し、低学年においては、連携する幼稚園の協力を得て円滑な接続に必要な具体的な指導や改善、課題等を検討する。同様に高学年についても、連携する中学校との間に協議の機会を設け、「創る科」が果たす役割や意義、教育的な効果等について検討する。○「創る科」の3つの授業形態について、それぞれの特徴や効果、相互の関係性、相応しい教材や指導方法等を検討する。○学びのポートフォリオとして「創る科ノート」を作成し、その記述をもとに、3つの授業形態の効果や課題、「創る科」の系統性を検討する。○「創る科」の指導に必要な教材の開発ならびに収集を行うとともに、教育効果を確認し、「創る科」の指導計画を策定する。</p> <p><評価方法>○運営指導委員会において「創る科」に関わる研究授業などを踏まえた評価を行うほか、幼稚園や中学校教員を交えた合同協議会において、各教科の融合や学校間の接続に関する評価を実施する。○評価指標を作成し、「創る科」学習における自己評価や相互評価を実施する。年間を通じた変化や教師による評価と参照し、評価指標の妥当性、「創る科」授業の効果や課題を明らかにする。○全ての子供を対象に自由記述式アンケートを実施し、「創る科」設置に伴う子供の変容について質的に評価を行う。</p>
<p>第 3 年 次</p>	<p><計画>○前年度までに取り組んだ知見をもとに、その意義や教育的効果について検証し、教育課程や指導方法、教材等を見直す。○教育課程全体を俯瞰し、教科や学年を超えた教育内容の統合整理等を実施し、「創る科」を組み入れた本校独自の指導要領の策定を目指す。○学校種間の接続に関しては、幼稚園や中学校との協議を引き続き実施するとともに、中学校での展開を視野に入れた指導内容、方法の検討を行う。</p> <p><評価方法>○実施3年目であることを踏まえ、学年進行に基づいて子供の意識や態度がどう変容したのかについて重点的に評価、検討する。○カリキュラム・マネジメントの観点から、学校種間の接続や各教科の融合について有効性を検証する。○保護者の視点からも「創る科」の学習効果を評価する。</p>
<p>第 4 年 次</p>	<p><計画>○「創る科」をコアとした教育課程の編成とその効果について総合的に検証する。○「価値の創出」と「価値の受容と評価」を、教科として取り入れたことによる子供の変容を中心に教育上の意義や効果や課題を整理する。○教育課程編成と指導上の留意点等について、一般化を前提に検討、整理を行う。</p> <p><評価方法>○研究期間全体を通じた最終評価として、全期間を通じた量的、質的評価を実施する。○子供や保護者に対するアンケートを実施し、研究開発の取組が、子供の意識や態度に及ぼした影響を評価する。○「創る科」の内容構成が、子供の発達段階や学校教育課程に照らして適切であったか否かを、総合的に評価する。</p>

別紙 1

山口大学教育学部附属山口小学校 教育課程表 (平成30年度)

	各教科の授業時数									特別の教科である道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育						
第1学年	291 (-15)		136		97 (-5)	68	68		102	33 (-1)			34	21	850
第2学年	300 (-15)		175		100 (-5)	70	70		105	35			35	20	910
第3学年	235 (-10)	68 (-2)	174 (-1)	87 (-3)		60	60		105	35		65 (-5)	35	21	945
第4学年	235 (-10)	88 (-2)	175	102 (-3)		60	60		105	35		65 (-5)	35	20	980
第5学年	165 (-10)	100	173 (-2)	100 (-5)		50	50	60	90	35	35	65 (-5)	35	22	980
第6学年	165 (-10)	105	175	100 (-5)		50	50	54 (-1)	90	35	35	65 (-5)	35	21	980
計	1401 (-70)	361 (-4)	1008 (-3)	389 (-16)	197 (-10)	358	358	114 (-1)	597	208 (-1)	70	260 (-20)	209	125 (+125)	5645

学校等の概要

1 学校名, 校長名

学校名 やまぐちだいがくきょういくがくぶふぞくやまぐちしょうがっこう
山口大学教育学部附属山口小学校

校長名 おかむら よしひさ
岡村 吉永

2 所在地, 電話番号, FAX番号

所在地 山口県山口市白石3丁目1-1

電話 083-933-5950

FAX 083-933-5951

3 課程・学科・学年別幼児・児童・生徒数, 学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	69	2	62	2	66	2	66	2	68	2	401	12

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1		1		16		1		1	4
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	1	3		30						

平成30年度研究開発実施報告書

1 研究開発課題

価値の創出と受容・評価をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究開発
～「創る科」の創設を通して～

2 研究開発の概要

新たな価値の創出と受容・評価に関する力は、これからを生きる子供たちに必要なものであり、全ての教科、学習活動を通じて育成すべきものである。本研究では、その基盤であり、かつ中核をなす教科としての「創る科」を設置し、これが各教科等及び学校種間のカリキュラム融合に果たす機能や教育的意義について検証を行う。新教科「創る科」の設置に当たっては、教育課程全体より必要な時間数を確保する。

創造的な思考や態度は、AIが進展する中で人間が優位性を発揮できる重要な領域と考えられる。「互いが創り出す価値を認め、考え協働する」ことによって、新たな時代を生き抜くのに必要な常識に捉われない見方や発想を育てるだけでなく、より実践的な人権教育、道徳教育にも寄与できると考えられる。そのための教育的価値の確立を目指し、本研究において、その学習内容の編成と意義を明らかにする。

3 研究開発の経緯

研究にあたっては、本校研究部が中核となって全体計画の立案・実施を進めるとともに、山口大学教育学部並びに教職大学院教員の協力による研究支援委員会を構成し、専門的な観点からの協力を得るようにした。以下、実施内容ごとに研究の経緯を整理する。

研究支援委員会 保護者説明
◇研究支援委員会 授業研究や内容評価に関わる専門的な支援を受けるため、山口大学教育学部並びに教職大学院に働きかけて、研究支援委員会を立ち上げた。
・第1回 6月27日(水) 14:30～16:00 場所:教育学部22番教室 内容:研究開発校に関する情報共有と研究内容に関する質疑。
・第2回 7月25日(水) 14:30～16:00 場所:教育学部22番教室 内容:附属山口小学校研究部教員が参加し、研究内容に関する質疑と今後の展望に関する共有。
・第3回 10月4日(水) 17:50～19:30 場所:教育学部附属山口小学校会議室 内容:既存教科に関する意識調査の分析結果と質疑、「創る科」で育成すべき力や指導方法に関する検討。
・第4回 12月4日(火) 11:50～13:30 場所:教育学部第3会議室 内容:「創る科」の内容と学習形態について質疑、提案。
◇カリキュラムおよび学校時程の見直し、保護者対応
・PTA総会 平成30年5月10日(木) 内容:研究開発学校の指定に関する報告と協力について
・カリマネ・タイムの実施 平成30年7月18日～7月25日 内容:「創る科」の授業時数確保等の検討の中で、学校時程を見直す。
・臨時PTA総会 平成30年6月16日(土) 内容:9月より、学校時程の変更することについて説明し、了承を得る。

校内研修・研修視察等（１）

	日 時	場 所	内 容
1	4月 2日（月）	附属山口小学校	創る科研究についての構想①（研究部）
2	4月 3日（火）	附属山口小学校	創る科研究についての構想②（研究部）
3	4月 4日（水）	附属山口小学校	創る科研究についての構想提案
4	4月18日（水）	附属山口小学校	創る科研究の取り組みについての協議（研究部）
5	4月19日（木）	附属山口小学校	創る科研究の取り組みについての協議
6	4月27日（金）	附属山口小学校	フリートークの行い方についての協議（研究部）
7	5月 1日（火） ～5月11日（金）	附属山口小学校	フリートーク交流週間
8	5月 2日（水）	附属山口小学校	フリートーク公開① フリートーク研修①
9	5月 8日（火）	附属山口小学校	カリキュラム作成についての協議（研究部・教務部）
10	5月 9日（水）	附属山口小学校	カリキュラムに関する研究協議・カリキュラム作成
11	5月10日（木）	学術総合センター	平成30年度研究開発学校研究協議会①
12	5月11日（金）	附属山口小学校	平成30年度研究開発学校研究協議会①の復伝（研究部） 今後の創る科研究の方向性についての協議①（研究部）
13	5月15日（火）	附属山口小学校	今後の創る科研究の方向性についての協議②（研究部）
14	5月17日（木）	山口大学	山口大学の先生を中心とした意見交換
15	6月 1日（金）	附属山口小学校	平成30年度の時程の変更についての協議（企画部）
16	6月 5日（火）	附属山口小学校	平成30年度の時程の変更についての協議
17	6月16日（土）	附属山口小学校	学校説明会において保護者へ時程の変更のお知らせ
18	6月27日（水）	山口大学	山口大学の先生を中心とした創る科研究についての協議①
19	7月 9日（月） ～7月20日（金）	附属山口小学校	フリートーク交流週間
20	7月13日（金）	附属山口小学校	創る科フリートーク公開②
21	7月18日（水）	附属山口小学校	創る科フリートーク研修②
22	7月19日（木）	附属山口小学校	創る科の考え方提案 各教科領域の資質・能力の表出
23	7月24日（火）	附属山口小学校	表出された資質・能力の検討
24	7月25日（水）	附属山口小学校	山口大学の先生と本校職員による協議
25	7月25日（水）	附属山口小学校	カリキュラムに関する研究協議・カリキュラム作成
26	7月31日（火）	附属山口小学校	フリートーク研修③ 本校同人を招致
27	8月20日（金）	附属山口小学校	山口大学 沖林先生によるアンケートの分析方法の受指導
28	8月22日（水）	附属山口小学校	資質・能力設定のためのアンケート作成（研究部）
29	8月27日（月）	附属山口小学校	資質・能力設定のためのアンケート実施
30	8月27日（月）	附属山口小学校	新時程スタート
31	8月30日（木）	附属山口小学校	ステップアップ学習スタート
32	9月10日（月）	山口大学	沖林先生によるアンケートの分析（資質・能力の分類）
33	10月 4日（火）	附属山口小学校	資質・能力に関するアンケート結果の分析
34	10月10日（水）	附属山口小学校	資質・能力の取りまとめについて協議（研究部）
35	10月17日（水）	附属山口小学校	フリートーク研修について協議③（研究部）
36	10月19日（金）	文部科学省	国立教育政策研究所 福本徹先生による受指導
37	10月25日（月）	附属山口小学校	フリートーク研修③
38	10月25日（木）	附属山口小学校	創る科フリートーク公開③ 山口大学 田本先生・宮木先生 受指導
39	11月15日（木）	附属山口小学校	研究部による創る科についての提案
40	11月22日（木）	附属山口小学校	公開研究発表会の授業者設定・タイムテーブルの検討
41	11月28日（水）	附属山口小学校	公開研究発表会の指導案形式についての協議（研究部）
42	11月29日（木）	附属山口小学校	公開研究発表会の運営についての協議
43	11月29日（木） ～12月24日（月）	附属山口小学校	各チームごとに指導案検討

校内研修・研修視察（２）

	日 時	場 所	内 容
44	11月6日（水）	附属山口小学校	公開研究発表会に向けての協議（研究部）
45	12月 4日（火）	山口大学	山口大学の先生を中心とした創る科研究についての協議②
46	12月 6日（木）	附属山口小学校	創る科授業公開（校内） 上智大学 奈須先生による受指導
47	12月10日（月）	附属山口小学校	公開研究発表会の運営についての協議（研究部）
48	12月12日（水）	附属山口小学校	公開研究発表会の運営についての協議
49	12月20日（木）	附属山口小学校	公開研究発表会に向けての指導案の検討について
50	12月25日（火）	附属山口小学校	公開研究発表会の指導案検討①
51	12月26日（水）	附属山口小学校	公開研究発表会の指導案検討②
52	12月27日（木）	附属山口小学校	国立教育政策研究所 浅見先生による受指導
53	1月 7日（月）	附属山口小学校	公開研究発表会指導案の修正・取りまとめ（研究部）
54	1月 9日（水）	附属山口小学校	公開研究発表会の運営についての協議（研究部）
55	1月10日（木）	附属山口小学校	公開研究発表会の運営についての協議
56	1月15日（火）	学術総合センター	平成30年度研究開発学校研究協議会②
57	1月15日（火）	東京学芸大学 国際中等教育学校	創る科研究に伴う研究視察①
58	1月17日（木）	附属山口小学校	公開研究発表会リハーサル
59	1月17日（木）	附属山口小学校	研究視察の復伝
60	1月18日（金）	附属山口小学校	公開研究発表会の運営についての協議
61	1月23日（水）	附属山口小学校	公開研究発表会の運営についての協議
62	1月24日（木）	附属山口小学校	公開研究発表会の運営についての協議
63	1月26日（土）	兵庫教育大学附属小学校	創る科研究に伴う研究視察②
64	2月 7日（木）	富山市立堀川小学校	創る科研究に伴う研究視察⑥
65	2月16日（土）	東京学芸大学 国際中等教育学校	創る科研究に伴う研究視察③
66	2月18日（月）	附属山口小学校	公開研究発表会の反省についての協議
67	2月19日（火）	福岡教育大学附属福岡小学校	創る科研究に伴う研究視察④ 意見交流会
68	2月20日（水）	附属山口小学校	研究視察の復伝
69	2月20日（水）	附属山口小学校	来年度のカリキュラムの編成についての協議（研究部）
70	2月22日（金）	お茶の水女子大学附属小学校	創る科研究に伴う研究視察⑤
71	2月22日（金）	附属山口小学校	フリートーク研修④ 山口大学 宮木先生による受指導
72	2月27日（水）	附属山口小学校	創る科研究についての反省と来年度の展望（研究部）
73	2月29日（金）	附属山口小学校	来年度の創る科の方向性について（研究部）
74	3月 5日（火）	附属山口小学校	フリートーク研修⑤
75	3月 6日（水）	附属山口小学校	創る科研究についての反省と来年度の展望①
76	3月20日（水）	附属山口小学校	創る科研究についての反省と来年度の展望②

運営指導委員会・研究発表会

	日 時	場 所	内 容
1	1月25日（金） 10:30~11:30	附属山口小学校	第1回 創る科運営指導委員会 研究開発校（1年次）の取り組みに対する助言、指導
2	1月25日（金） 12:30~16:35	附属山口小学校	公開研究発表会 研究概要紹介、公開授業（6授業）実施。 鼎談（上智大学教授 奈須正裕 氏、国立教育政策研究所総括研究官 福本徹 氏、附属山口小校長 岡村吉永）

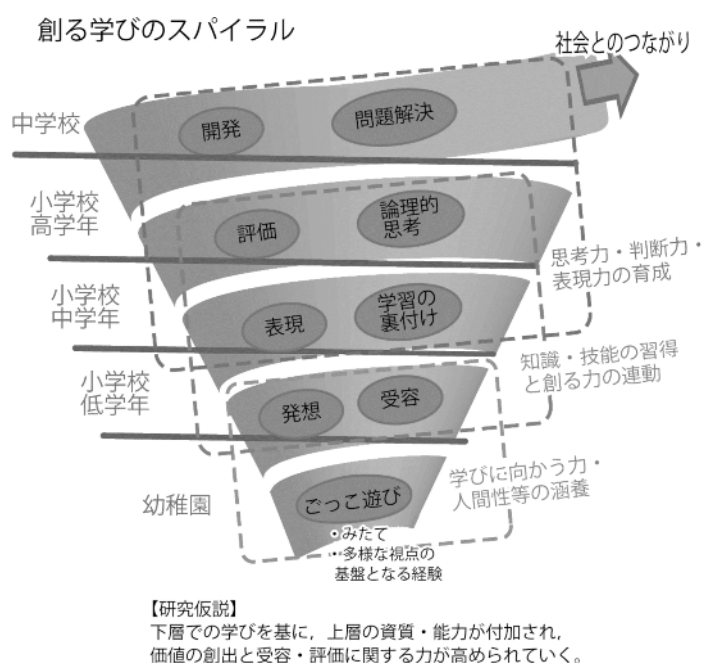
4 研究開発の内容

(1) 研究仮説

本研究開発では、創造的な思考や態度は、慎重に計画された教育活動を通じて段階的かつ着実に育成できるものであり、その教育は、学校における全ての教育活動において、その理念を共有して行われるべきものであるとの仮説に立脚する。こうした教育活動を意図的に行うために新教科「創る科」を創設し、価値の創出を通して自分らしい考え方や挑戦する態度を育成し、価値の受容を通して対立やジレンマを克服する力を、さらに価値の評価において公正・公平な見方や責任ある行動を取れる力を育成するよう、教育課程を設定する。研究初年度である今回は、研究の蓄積ならびに実践面での蓄積が十分でないことを考慮し、既存各教科の授業数減が教育課程に影響を生じないよう、優先的に研究支援委員会や校内研修の場を整備した。「創る科」の授業は、10月以降に実践し、現在時点において、教育課程への支障は生じていない。また、「創る科」としての授業実践時数は、実践がやや後半にずれ込んだにもかかわらず、当初計画を上回っており、順調に実施できたと考える。

一方、「創る科」の内容構成については、指導方法や教材に関する検討が不十分で、具体的な指導コンテンツも不足している。

特に、創る学びのスパイラルとして挙げた幼児から中学生に至るまでの学びのプロセスについては、その妥当性や要素間の関係性、既存教科との関わり等の検討が進んでおらず、「創る科」として実施した授業の位置づけが曖昧となっている。次年度、重点的に取り組む必要がある。

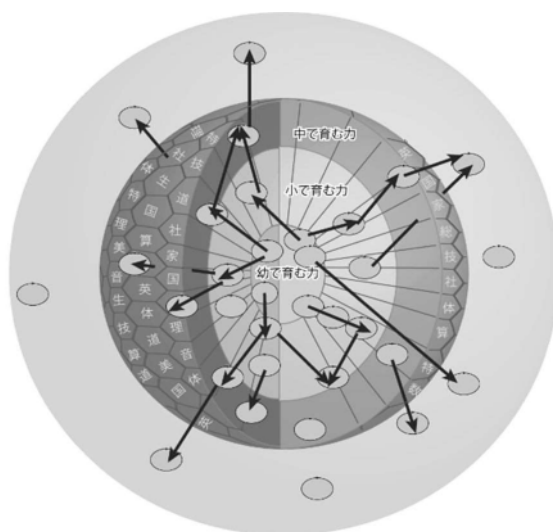


「創る科」で想定する学びのスパイラル

(2) 教育課程の編成

① 学びを通じた子どもの成長 (幼小中を通して育む力)

子供は、幼児期から小学校さらに中学校へと年齢を重ね、最終的に社会で自立していくことが望まれる。その成長は決して直線的ではなく、その子の個性や興味、その時々々の環境等の影響を受けるため、その可能性は全方向とってよい。学校での学びの中核となる各教科についても、こうした子供の実態を反映し、図のように、相互に関わりながら、かつ多様な組み合わせがな



幼小中を通して育む力のイメージ

れる必要がある。本研究開発では、教科同士の密接な関わりを実現し、こうした子供の可能性に応えるため、「創る科」を軸とした教科融合カリキュラムを開発、検討する。

② 「創る科」を軸とした教科融合カリキュラムの考え方

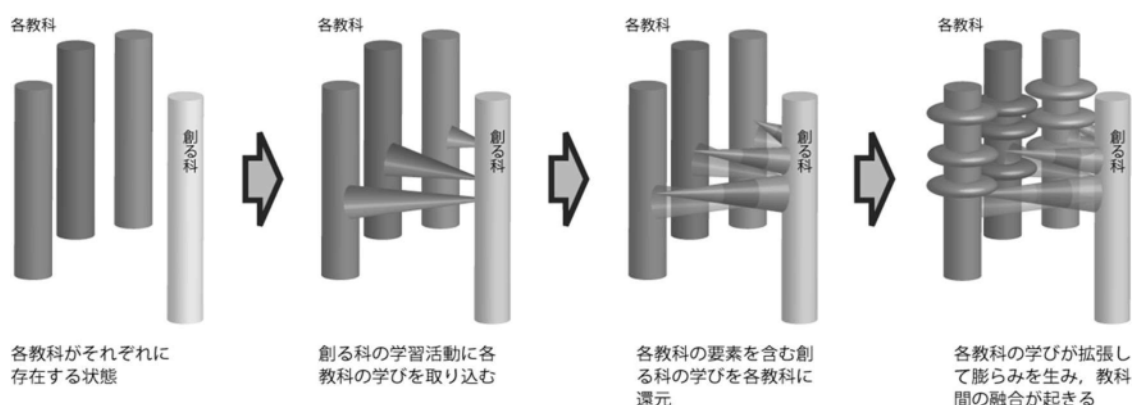
価値の創出と受容・評価をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究を実施するにあたって、本研究では、その軸に「創る科」を置くことで、より円滑かつ有機的な実現が図れるという仮説をたて、授業形態等の取組を試行した。「創る科」を軸とする各教科の融合のイメージを次図に示す。

図の左端は、各教科が互いに関係を持たず単独に存在しており、「創る科」が機能する前の状態を示している。

左から2番目の図は、「創る科」の中に各教科の学びを取り入れたり、「創る科」のなかで各教科を融合させたりするイメージで、第一段階の教科融合にあたる。

続いて3番目の図では、「創る科」に取り込まれた各教科の学びを混ぜ合わせて、それぞれの教科に還元する。この段階で、各教科には、他教科での見方や考え方が取り込まれることになる。

右端は、新たに取り込まれた見方や考え方によって各教科の学びが拡張し襲のような膨らみを生じた状態である。単独に存在していた教科同士が襲によって接触し合う。これによって教科融合が誘発され、教科同士が必然的、有機的につながりを生じることになる。この段階が第二の教科融合であり、本研究開発が目指そうとするものである。



「創る科」を軸とした各教科の融合に関するイメージ

③ 教育課程の特例

本年度は、現行の学習指導要領に示された総授業時数の実施をもって全課程の修了とした。新教科「創る科」の授業時数については、道徳科や総合的な学習の時間など、既存の教科から時数を捻出するとともに、これまで授業として扱ってこなかった朝のフリートーク（毎日15分）の一部を「創る科」とすることで確保した。授業内容に合わせて授業時間を弾力的に設定することは、学び方の改善だけでなく、過密な学校時程を解消する上でも効果のある実践だと考える。なお、「創る科」の授業時数は、研究1年次であることを踏まえ、当初、各学年とも10時間の実施を目標とした。

④ 学校時程の見直し

研究開発学校として先行する福岡教育大学附属福岡小学校では、各教科や学年で重複していた指導内容を見直し、融合的なカリキュラムを実施することでカリキュラムを縮減し、週当たりの授業時数を削減することに成功している。本校においても、上述した「創る科」

を軸とする教科融合カリキュラムを検討する中で、総授業時数を下回らない範囲で授業時数縮減が可能と判断し、年度後半（夏休み明けの9月）より週当たりの授業数を減じる学校時程を試行した。

本校は、時間の有効活用を目指して平成12年度より15分を単位としたモジュール制を取ってきたが、柔軟な時間運用を続けるうちに過剰な時間が積み重なり、本年度4月時点での下校時間が近隣の小中学校よりも遅いという実態を生じていた。単純な比較はできないが、一般的な小学校に比べ、子どもや教員に過負荷を与える学校時程であったと思われる。加えて、通学区が広く、遠方よりバス通学する児童が相当数いるという本校の実情を踏まえると、放課後の帰宅時間が著しく遅くなる児童の存在は、安全対策上、速やかな改善が必要と考えられた。こうした事情もあわせて検討した結果、具体的には、下図のように、水・木曜日の午後は、全学年で授業を行わず、その他の曜日についても下校時間を40分早めることとした。

こうした学校時程の変更を可能にする工夫ならびに要因の一つは、従来から本校が行っているフリートークと呼ぶ朝の会中に行う15分間の話し合い活動を見直し、一部を「創る科」の授業としたことがあげられる。さらに、年間の授業時数に占める余剰分を見直し、適正な量に減じたことも要因の一つである。悪天候による休校や学級閉鎖等の不測の事態に備え、授業時数に余裕を持たせることは必要であるが、見直すことによって、それが過剰であったことに気付くことができた。ただし、この取り組みは当初計画になかったものであり、目的や効果を検証する準備がなかった点は猛省が必要である。学校時程については、次年度に向けて再度見直す計画であり、教育課程に対応した学校時程の在り方についても研究の一部として取り組んでいきたい。（学校時程の詳細：資料1）

年度前半 学校時程

学年		月						火						水						木						金														
登校	800																																							
朝の会	805-825																																							
1校時	830-915																																							
2校時4M	925-1025																																							
中間休	1025-1040																																							
3校時	1040-1125																																							
4校時	1135-1220																																							
給食	1220-1300																																							
昼休	1300-1340																																							
掃除	1340-1355																																							
着替	1355-1405																																							
5校時	1405-1450																																							
6校時	1500-1545																																							
帰りの会	1545-1600																																							
下校	1600																																							

年度後半 学校時程

学年		月						火						水						木						金													
登校	800																																						
朝の会	805-825																																						
1校時	830-915																																						
2校時3M	925-1010																																						
中間休	1010-1025																																						
3校時	1025-1110																																						
4校時	1120-1205																																						
給食	1205-1245																																						
昼休	1245-1315																																						
掃除	1315-1325																																						
着替	1325-1335																																						
5校時	1335-1420																																						
6校時	1430-1515																																						
帰りの会	1515-1520																																						
下校	1520																																						

学校時程の見直し

⑤ 次年度の研究に向けた気付き

「創る科」を軸に置いて各教科の内容を見直したことや教科融合型学習を行ったことで、各教科の特質や構成がより明確化されることに気付いた。すなわち、より深い学びのためには、各教科の見方、考え方に沿った教科ならではの概念に触れることが重要であり、それには過剰な内容を削ぎ落して、教科本来の輪郭を見えやすくすることが求められる。次年度以降、教科融合カリキュラムに関する研究として、この仮説を基に既存教科の時数を含めた教育課程全体の見直しに着手したい。

(2) 新教科「創る科」について

本研究開発では、新たな価値の創出と受容・評価に関する力を育成するための基盤であり、各教科等及び学校種間のカリキュラム融合を図るための中核的な教科として、新教科「創る科」を設置する。現時点における「創る科」の目標や内容を以下に整理する。

① 目標

多様で持続的な社会を形成する主体者としての見方・考え方を働かせ、横断的・創造的な学習を通して、新たな価値の創出、受容・評価が適切に行えるための資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 学んだことや経験を基に発展的に考えることや、物事の本質を多角的に捉え直すことで、価値の創出や発見が行えるようにする。
- (2) 人との関わりの中で思考力や想像力を高め、新たな価値を適切に受容・評価し、伝え合うための力を養う。
- (3) 学びや生活の中で生まれる価値の意味に気付くとともに、進んで価値の創出と受容・評価を行えるよう、その能力の向上を図る態度を養う。

② 「創る科」の内容構成

新設する「創る科」の内容は、以下のA及びBで構成する。

A 価値の創出に関すること

- (1) さまざまな課題を、創造的な思考や態度で対処すること。
- (2) 学んだことを基に考えたり、工夫の中に生かしたりすること。
- (3) ことばや絵などを用いて、「思いつき」を他者に伝達すること。
- (4) 他者と協働することなどを通して、「思いつき」を形にすること。

B 価値の受容・評価に関すること

- (1) 自他のアイデアやアプローチを比較し、その違いや良さを伝え合うこと。
- (2) 多様な視点から課題を捉え、改善の方策等を具体的に示すこと。
- (3) 身近な物などに潜む先人の工夫や観点到に気付くこと。
- (4) 新しい考えや事物を受け入れ、自分の活動に反映すること。
- (5) 既存の価値や方法の改善、見直しに関わること。

③ 「創る科」の学習に対する評価

「創る科」の学習に対する評価については、今後の研究で明らかにしていく計画であるが、現時点で想定する内容や観点等をここで整理する。

「創る科」では、その特質が生かされるよう上記の内容を踏まえて、活動や学習の過程、報告書や作品、発表や討論などにみられる学習の状況や成果などが評価の対象となる。評価の観点としては、主に創造的な思考の基礎となる「知識・技能」、その表現や評価に関わる「思考力・判断力・表現力等」、主に創造的な態度や価値の受容

に関わる「学びに向かう力・人間性等」について内容項目を整理し、観察および成果物等を基に実施することが考えられる。学びの履歴としてのポートフォリオ活用も有効な評価手段であり、適切な記録方法等についても検討が必要である。参考として、研究開発申請時に付した「創る科」の内容構成（想定）を次ページに示す。上述の①目標や②「創る科」の内容構成ができる以前ののものであり、内容に不整合もみられるが、具体的な指導事項等を検討していくうえでの出発点になるものである。

④ 創る科と他教科との関連

【認知的・非認知的能力に関する調査（因子分析）】

新教科「創る科」の性格や位置づけを明確にするための資料を得ることを目的に、各教科（創る科を除く）で学習させたい力とはどのようなものかを本校教員に調査した。この調査は、各教科（もしくはグループ）で必要と思われる資質・能力を挙げ、共通しているものや類似しているものを探ることで、各教科の性格や相互の関係性や「創る科」の位置づけがみえてくるのではないかという提案が動機となっている。下の写真は、7月19日に実施した研修の板書で、各教科・領域で必要とされる力を、教科を底辺に置いてボトムアップ式で教員たちが黒板に書き込んでいったものである。この板書記録を基に本校研究部と支援員会で用語を拾い出し、教科で育成すべき資質・能力に関する調査紙（資料2）を作成した。



各教科・領域に必要な力のあぶり出し

調査は、質問紙調査とし、教科ごとに、示された項目内容がどの程度学習に必要なかを1～6の6件法で回答するようにした。項目内容は、次ページの図に示す、認知的能力に関するもの24項目、非認知的能力に関するもの11項目で構成し、支援委員会のメンバーである大学教員の力を借りて因子分析を行った。下の写真は、因子を解釈する作業途中の板書である。

まず認知的能力因子は、5つの因子に整理され、分類された項目内容から因子1を言葉にする力、因子2を見極める力、因子3を捉える力、因子4を試行錯誤する力、因子5を開発する力と命名した。各因子と教科との関係は、その右に示す表



因子分析結果の検討作業（板書）

「創る科」の内容構成（想定）

目 標	育てようとする資質・能力	学習内容	学習活動（単元）	その他	
未来を創り出す能力を身につける	新たな価値を生み出す力	発想	見方を変えてみる	等価変換的なアプローチ	
			人とは違う見方，着想の面白さに気付く	自他の良さを認める（道徳的価値との結びつけ）	
			日常の当たり前に潜む課題に気付く	興味関心，科学的視点の育成	
		問題解決	学習の裏づけ	具体的な課題に対する創造的取り組み	身近な課題への挑戦，先人の知恵に学ぶ
			社会的な視点で問題解決をする	ESDの視点で問題解決をする	発展的かつ持続可能なアプローチ
		自らの工夫を表現する力		表現	自分の工夫をスケッチで表す
	自分の工夫を他者に説明できる		プレゼンテーションスキルの向上		
	論理的思考		自分の工夫の良さや課題を説明できる	自らが創出した価値に対する自己評価	
	他者と共に創り出す能力を身につける	他者の生み出した価値を受容する力	受容	他者の着想や工夫から学び，その良さを認める	「道徳」の主として人と関わることと関連 他者が創出した価値に対する評価
				評価	他者の着想や工夫を受け入れ，進んで自他の課題解決に生かす
協働して問題解決に向かうための力			開発	創造的に協働するための技法を身に着ける	話し合いのルールや技法（バズなど）
		課題を整理し，ゴールへ導くための作業ができる		KJ法，認知的課題解決の手法など	

のとおりである。

なお、ここで分類されなかった内容項目（太線で囲んだ因子が 99 となっているもの）をみると、妥当性を探る力や選択・判断する力、気付く力といった学びを支える基盤的な力であることに気付く。こうした項目は決して重要度が低いわけではなく、各教科で重視する学びの中で、相対的に重要度が低くなったと捉えるべきであろう。教科融合型カリキュラムの軸である「創る科」においては、こうした学びを支える基盤、すなわち「学びを進める力」を教科の特質としてより積極的に取り扱っていくことが考えられる。

非認知的能力因子（図中下段）については、因子1を人とうまくやる力、因子2をおもしろいと感じる力と命名した。右の教科との関わりをみると、非認知的能力については、いわゆる実技系教科や道徳に関与が深いとみられていることが分かる。

次年度以降、本研究では、5つの認知的能力因子に学びを進める力を加えた6つの認知的能力因子、ならびに2つの非認知的能力因子を意識した指導を全ての教科で進めて行く計画である。

認知的能力因子と教科の関係

No	項目内容	因子	No	項目内容	因子
02	他者に考えを受容する力	1	03	自分事として考える力	4
05	言語感覚	1	16	試行錯誤する力	4
06	場面や相手に応じて言葉を選ぶ力	1	21	構想する力	4
14	問題を見出す力	1	22	発想する力	4
18	情報を収集する力	1	07	情報を処理する力	5
24	他者に伝える力	1	09	論理的思考力	5
08	批判的思考力	2	13	発展的に考える・応用する力	5
10	比較する力	2	12	妥当性を探る力	99
11	関連付ける力	2	15	選択・判断する力	99
01	多面的・多角的に考える力	3	17	気付く力	99
04	自己を見つめる力	3	19	先を見通す力	99
23	からだ全体の感覚を働かせる力	3	20	解決方法を考える力	99

因子1：ことばにする力 因子2：見極める力 因子3：捉える力
 因子4：試行錯誤する力 因子5：開発する力

学びを進める力として認知的能力因子に加える

教科と認知的能力因子の関係		因子				
		1	2	3	4	5
	国語	4.29	4.58	3.58	3.25	4.19
	社会	3.58	4.25	3.33	2.08	4.19
	算数	3.28	4.11	3.28	3.67	5.04
	理科	2.54	4.17	2.92	3.75	4.56
	生活	3.20	2.87	3.47	4.07	2.70
	音楽	2.50	3.00	4.33	4.83	2.94
	図工	2.33	2.42	4.33	5.58	3.00
	家庭	2.88	3.50	3.25	3.42	4.00
	体育	2.90	2.67	4.33	3.20	3.20
	総合	3.61	3.22	3.44	3.33	4.00
	外国語	4.46	3.75	3.75	2.50	3.00
	道徳	3.54	3.42	4.25	1.75	3.19

非認知的能力因子と教科の関係

No	項目内容	因子
01	道徳性	1
02	人とつながろうとすることができる	1
03	互いに思いやることができる	1
05	自己理解・他者理解することができる	1
06	協働することができる	1
08	対象に対する愛情	1
09	喜びを味わうことができる	2
10	没入・没頭することができる	2
11	生涯にわたって親しむことができる	2
04	地域（国民・国際社会）の一員としての自覚をもつことができる	99
07	主体性	99

因子1：人とうまくやる力 因子2：おもしろいと感じる力

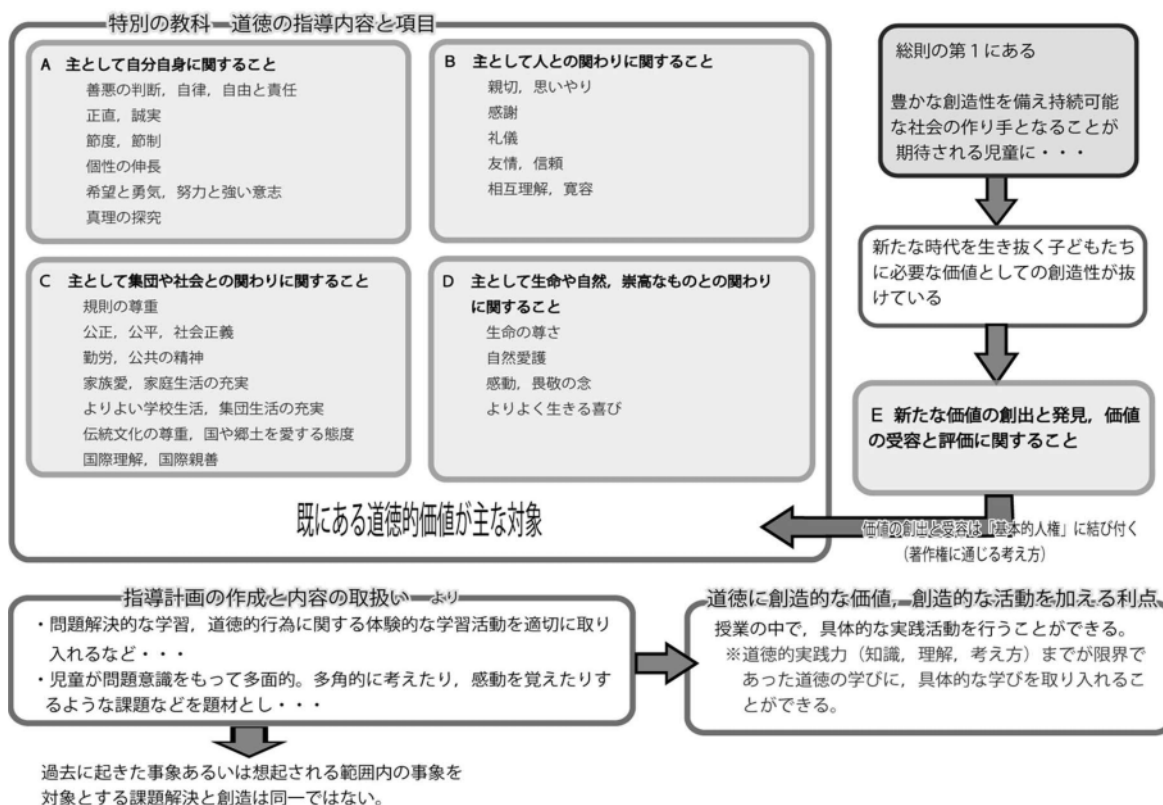
教科と非認知的能力因子の関係		因子	
		1	2
	国語	2.90	2.63
	社会	3.75	1.50
	算数	2.60	2.67
	理科	2.05	3.38
	生活	4.28	4.30
	音楽	3.40	5.50
	図工	2.90	5.31
	家庭	2.80	4.00
	体育	3.84	4.85
	総合	3.20	2.75
	外国語	4.60	2.75
	道徳	5.10	2.44

教科の学習に必要な力に関する因子分析（教員の意識）

【特別の教科道徳との関わり】

冒頭、研究開発の概要で述べたように、「創る科」では、「『互いが創り出す価値を認め、考え協働する』ことによって、新たな時代を生き抜くのに必要な常識に捉われない見方や発想を育てるだけでなく、より実践的な人権教育、道徳教育にも寄与できる」ことを仮説としており、道徳科との関わりが深い教科と捉えている。

次ページの図は、特別の教科道徳（以下、道徳科）の指導内容と項目（A～D）を左



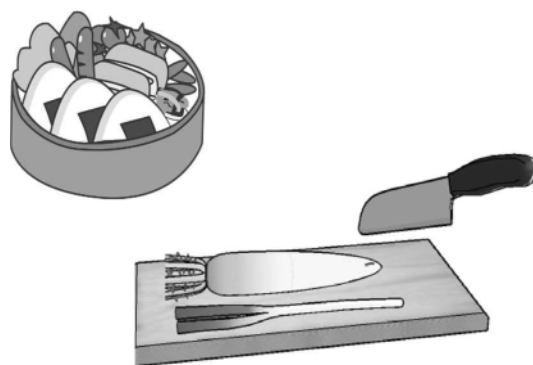
上の枠中に整理した。全て重要な内容・項目ばかりであるが、同枠内の下方に記したように、既にある道徳的価値が主な対象であり、今後生じる価値あるいは新たな価値を生じる行為については、詳しく触れられていないことに気付く。「創る科」では、枠外、右に示した考え方をもとに新たな項目として「E 新たな価値の創出と発見, 価値の受容と評価に関すること」を教科で育成すべき資質と捉え、道徳科の学びを補完する機能をもたせたい。一方、新たな価値の創出, 発見には、常識や既存の価値との葛藤が不可避であり、その解決のために充実した道徳科の学びや道徳的経験が不可欠である。道徳科と「創る科」との関係が、意味ある相互補完となるよう研究を進めたい。

【総合的な学習の時間や既存教科との関わり】

総合的な学習の時間(以下, 総合)と「創る科」との関係性を明らかにすることは、申請時からの重要な課題となっている。研究1年目を終える段階で十分な答えを示すには至っていないが、研究を通じて「創る科」の輪郭が見え始めたことも事実である。今後の研究の方向性を示す仮説として、総合を含む他教科と「創る科」との関係について考え方を示す。なお、現段階では、内容を適切に表す用語や概念に関する考察が不十分であり、料理を例えにした説明となることをお許しいただきたい。

既に述べた因子分析では、各教科の学びに必要な力として整理された中に「学びを進める力」が含まれないことが明らかとなった。あくまで、本校教員の意識上のことであるが、教科内容に重点がおかれ、学び方や学んだことをどう生かすのかといった点は、教科の学びの中で自ずと獲得されていくものと認識されていたのかもしれない。新学習指導要領においても、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められているように、これからを生きる子供の資質・能力を育成するにあたっては、学習の過程や学び方などの「手段」が重要性を高めている。すなわち「学び方を学ぶ」という手段を目的化し、教

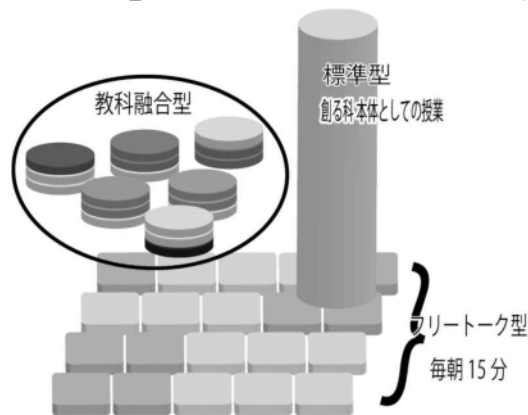
科化する必要があると考えられる。料理に例えれば、ダイコンやネギといった素材としての各教科があり、それらの学びを調理し統合したものとして総合的な学習の時間がある。よい料理を作るためには、「手段」としての調理が必要であり、包丁やまな板の使い方を学ぶことが欠かせない。「創る科」とは、台所の包丁やまな板であり、それを使えるようにする教科といってよい。包丁とまな板がうまく使いこなせれば、ダイコンやネギの様々な断面を見ることができし、賽の目に切って素材の形を変えることもできる。自分なりに包丁を使いこなすこと、すなわち「学び方を手に入れる」ことができれば、各教科の本質や概念をより効率的、効果的に学ぶことが可能となるに違いない。次年度以降、学習活動における子供の姿や成長を通して、この仮説を明らかにしていきたい。



総合を含む他教科と「創る科」の関係

⑤ 「創る科」の授業形態

新教科「創る科」では、子供の創造的な思考や態度が育成されるよう指導内容や場面に合わせた授業形態をとるようにした。本年度実施した形態は三つで、下図にそのイメージを示す。インターバルを取りながらより多角的、協働的に思考するため、継続的に毎朝15分間の話し合い活動を実施するものを『フリートーク型』、教科融合型の学習によって多様な見方、考え方の獲得を目指すものを『教科融合型』、創造的かつ実践的な活動を通して価値の創出と受容・評価について学ぶものを『標準型』とする（各授業形態の名称は、試行段階の仮称であり、研究を推進する中で適切に定めていく）。なお、一つの授業が並行して三つの授業形態を取ることにについては、学校時程の柔軟な運用等の利点がある一方で、分かりにくさがあるのも事実である。今後の研究を通して各授業形態の特性や相互の関係性や効果を明らかにするとともに、「創る科」という教科からみた意義を明らかにしていきたい。その際、三つの授業形態が必ず必要となるのか、あるいは特定の授業形態や組み合わせでどのような効果が生じるのかについても検証したい。



「創る科」の三つの授業形態

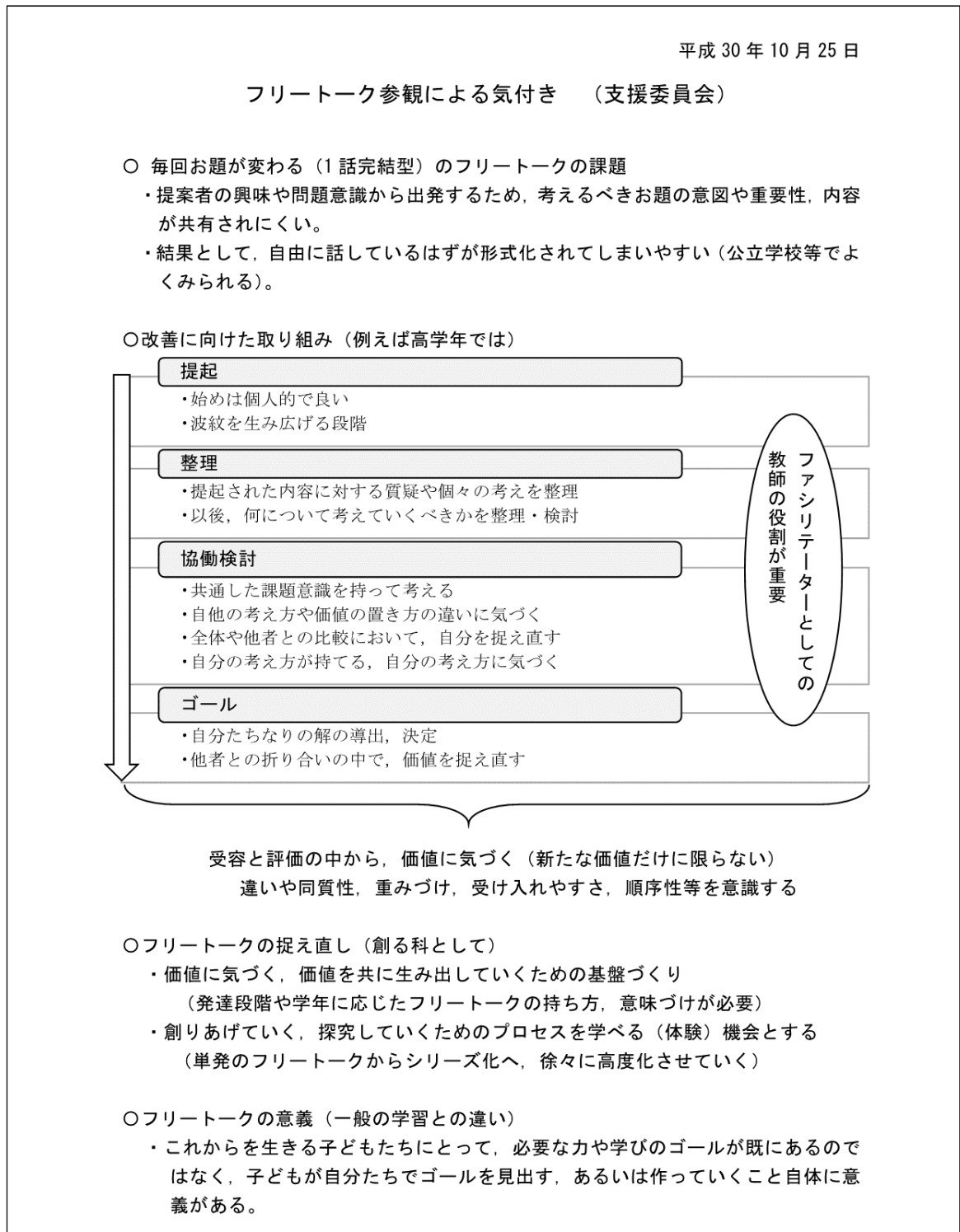
【フリートーク型授業について】

本校がこれまで大切にしてきた活動で、互恵的な関わりを育むことに加え、より多角的、協働的に思考できる力を身に付けさせることを目的としている。毎朝15分を取って、その日のテーマ（子供が提案するお題）について話し合い活動を行うものである。後ほどのアンケート分析でも触れるが、活動が、子供同士のいわゆる「言いつばなし」に終始し、思考を深めるための機能を十分果たしていないことが指摘されてきた。以下は、フリー



フリートーク型授業

トーク参観後の支援委員会（大学教員）の指摘を整理したものであり、これを真摯に受け止め、「創る科」の授業の一部として質の向上を図っていくことが求められる。



【教科融合型授業について】

教科融合型授業については、「創る科」として実施する場合や、各教科の中に他の教科の視点を取り入れてみるなど、多様な形態や方法を模索している。学びが深まったという印象を抱く教員がいる一方、教科融合の方法や効果についての検証が不十分であり、教育課程上に位置づける上での曖昧さが課題となっている。

ここでは、ユニークな例として、校種を超えた中学校の技術・家庭科（技術分野）と図

画工作科との融合を紹介する。(ただし、本年度は、図画工作科の授業として実施した。)

「創る科」融合型授業実践例（図画工作＋技術・家庭科）

図画工作での作品制作に「創る科」の要素を取り入れ、より完成度が高く、子供の工夫が生かされる実践を試行した。題材は、中学校の技術・家庭科（技術分野、A材料と加工に関する技術）の練習題材として岡村ら*が提案したもので、通常4枚以上の部材が必要な小物入れを3枚の部材で構成している。部材を1枚減らすだけで、板の木取りや切断に要する時間等を大幅に短縮することが可能で、その分を子供の発想を生かした意匠や完成度を高めることに充てることができる。以下に授業構想と子供の作品例を示す。

○題材「1枚の板から」（6年図画工作）

（目標）1枚の板から無駄のない使い方を考え、形や色を工夫して、長く使えて生活が楽しくなるものをつくる。

○予定（全6時間）

6年2組 34人

- 1月10日（木） 2校時3M・・・アイディアスケッチ，木取り
- 1月24日（木） 1・2校時6M・・・製作
- 1月28日（月） 5・6校時6M・・・製作
- 2月18日（月） 6校時3M・・・振り返り，鑑賞

6年1組 34人

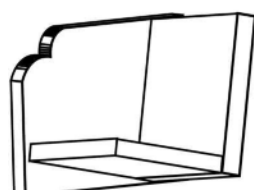
- 1月17日（木） 2校時3M・・・アイディアスケッチ，木取り
- 1月31日（木） 1・2校時6M・・・製作
- 2月4日（月） 5・6校時6M・・・製作
- 2月14日（木） 2校時3M・・・振り返り，鑑賞

○材料・用具

ヒノキ ムク材 9mm×90mm×330mm

両刃のこぎり，キリ，金づち，糸のこ盤，紙やすり（＃80，50），刷毛，くぎ（15mm），木工用接着剤，アクリル絵の具，ニス

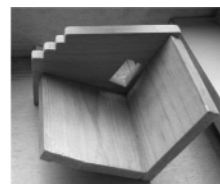
○作品例



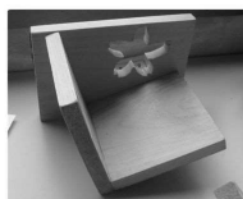
3つの部材による基本構成



作品の校内展示



児童作品例①(階段と窓)



児童作品例②(表と裏)



児童作品例③(カジキマグロ)

*岡村吉永，平田直樹，伊藤文雄，山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要第43号，2017.3

【標準型授業について】

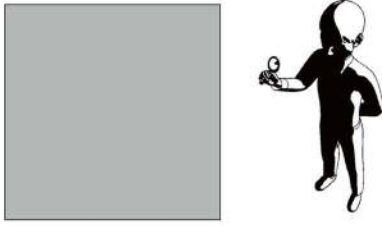
「標準型」は、新設教科「創る科」の本体をなすもので、子供の創造的な思考や態度を段階的、積極的に育成することを目指している。この標準型が効果を発揮するための基盤が「フリートーク型」や「教科融合型」の授業であり、今後の研究を通じて相互の関係性を明確にしていく必要がある。標準型を機能させるためには、子供のコンピテンシーを伸長させるための優良なコンテンツが大量に必要であり、この開発、収集が今後の課題である。

また、標準型授業を成功させる上では、日常的に課題を見出し、自分なりに解決策を考え続ける雰囲気醸成することも求められる。このための試行として、10月以降、月に1枚のペースで、児童が学習を生かした思考を働かせたり、周囲の事物への関心を高めた

校長からの挑戦状 1!

折り紙で、60度の角をつくれるかな?

折り紙は、正方形でなくてもいいよ。
コピー用紙や広告の紙でもOK

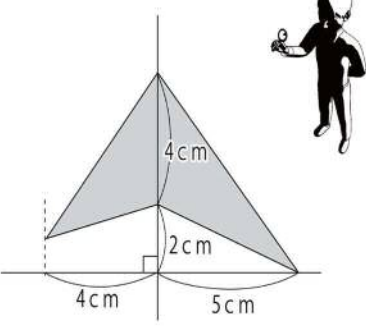


条件

- ・折り紙は、まっすぐにしか折れない。
- ・折る回数は5回以内。
- ・定規や分度器、コンパスは使えない。

校長からの挑戦状 2!

四角形の面積は?



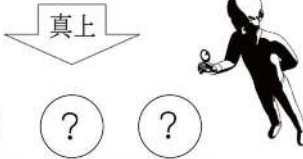
ヒント：工夫すれば、暗算でもできちゃうよ!

校長からの挑戦状 3!

真上から見たらどう見えるかな?


A: 円すいを底面と平行な面でスッと切ったらどう見えるかな?
B: そのまま何もしない円すいの場合、どう見えるかな?
C: 雑問! 真横からV字に切ったらどう見えるかな?

真上



?


A



底面

?


B



底面

?

C



底面

校長からの挑戦状 4!

いちばんちがうのはどれ?

下のあいうの船の中で、いちばんちがうのは、どれでしょう?
※ちゃんと理由を説明できますか。



あ



い



う



りする工夫も試行した。給食調理室へ続く廊下に貼りだした問題では、算数や理科等で学習したことの意味に気付き、多角的に考えることやよく観察することの大事さに気付く児童の様子が少しずつ見られるようになってきた。ただし、一定の効果がみられる一方、問題によって反応に著しい差もみられた。標準型授業の課題設定を行う際の参考として、次年度以降計画的な取組を検討したい。

⑥ 授業参観者の記述を基にした分析

研究発表会において、授業参観者から得たアンケートの自由記述をもとに、研究支援委員会の協力を得て、創る科の授業がどのように捉えられていたのかを分析した。対象とした授業は、下記に示す6つで、これを授業形態別に4分類しテキストマイニング（分析にはKhcorderを使用）を行った。上位60語について対応分析したものを下図に示す。

【対象授業】

○フリートーク型

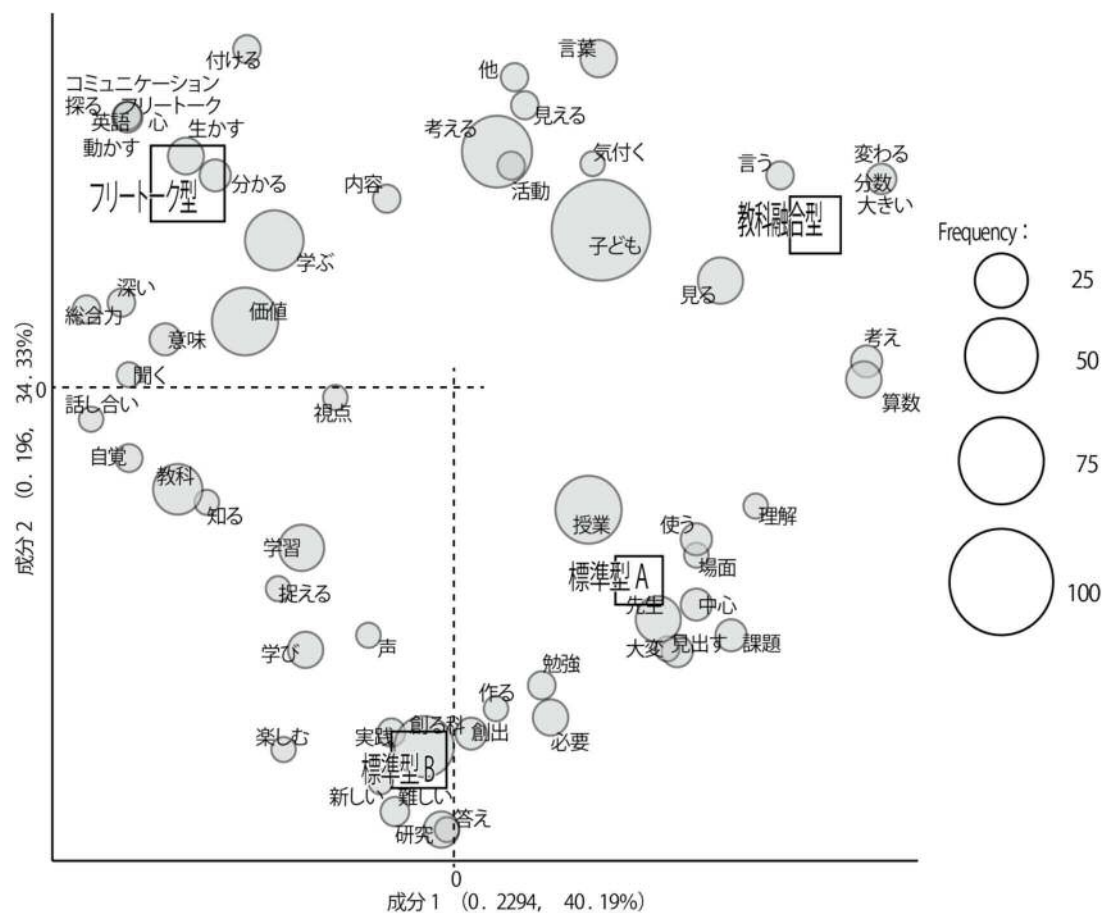
- ・「『心の動かし方』を探ろう」、6年1組、授業者：西村光博, 寺内 健, (指導案1)

○教科融合型

- ・「定量的・定性的に表すよさ」、3年1組、授業者：森戸 幹, (指導案2)
- ・「分数で考える1の価値」、3年2組、授業者：岡本貴裕, (指導案3)

○標準型A

- ・「学びや経験を基に考える」、5年1組、授業者：岡村吉永, 大賀拓也, (指導案4)



授業参観者の記述を基にした対応分析（上位60語）

○標準型 B

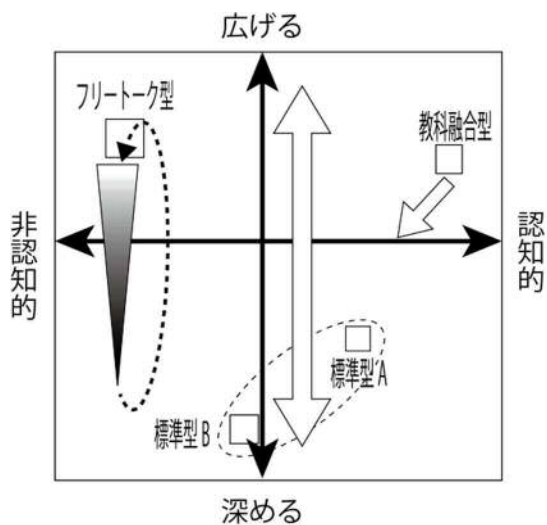
- ・「探究的な学習の価値を問う」，4年2組，授業者：小林弘典，(指導案5)
- ・「6年間の学びを生かして ～感謝の気持ちを「和」で表そう～」，6年2組，授業者：重枝孝明，(指導案6)

結果をみると，成分1（横軸）は，右側に教科の学習に関わりの強い認知的能力に関わる単語が集まり，左側には協調性や態度に関わる非認知的能力に関わる単語が集まる傾向がみられた。同様に成分2（縦軸）をみると，上側に思考を広げたり情報を伝え合ったりするような単語が多く，下側は，情報を吟味したり思考を深めたりするような単語が集まっていた。各授業形態の位置は図に示したとおりであるが，考察しやすくするため，第1軸を認知的－非認知的，第2軸を思考の向き（広げる－深める）として簡略化し，以下に示しなおす。

まずフリートーク型授業をみると，第1軸は非認知的側，第2軸は思考を広げる側にあり，子供同士が協調的な活動を通して思考を共有し，広め合おうとする授業だと参観者に受け止められたことが分かる。本校がフリートークを推進してきた根本にあたるもので，妥当な受け止めがなされたといえよう。この一方，本校では，以前からフリートークが子供同士のいわゆる「言いつばなし」に終始し，思考を深めるための機能を十分果たしていないことが指摘されてきた。「創る科」の授業としてフリートークの再構築に着手したところであるが，参観者の記述を見る限り，その成果はまだ十分とはいえない。今後は，図中にグラデーションで示した下向き三角のように，一旦広げられた思考が次第に深められ絞り込まれていくような学びが，非認知的領域で繰り返されるよう工夫し，その効果について研究を進めたい。

教科融合型授業については，第1軸は認知的側，第2軸はやや思考を広げる側にあると参加者に受け止められたことが分かる。既存の教科に関する同様の調査資料がなく，実際の比較はできないが，おそらく似た傾向であったであろうことが想像される。今後は，複数の教科を融合させる意味や効果を明らかにし，その違いが参観者にも明確となる授業を作っていくことが求められる。その際，図中に矢印で示したように，複数の教科を生かした学びによって一層学びが深まったり，多様な視点に気付くことで非認知的要素が強まったりすることを意識することが必要だろう。

標準型授業について，第1軸は，認知的と非認知的の中間からやや認知的側に寄った位置づけと捉えられていた。標準型A「学びや経験を基に考える」ならびに標準型B「探究的な学習の価値を問う」「6年間の学びを生かして ～感謝の気持ちを「和」で表そう～」の授業題目が正しく授業内容に反映されていたとすれば，参観者の受け止めは妥当であり，授業者が意図したものと合致する。ただし，第2軸の思考の向きに関しては，ただ深めるばかりでなく，子供の協働的な関わりも重視してい



各授業型の位置づけ

たことから、その意図が十分伝わる授業には成り得ていなかったと言わざるを得ない。創造的な思考や活動には、集中と拡散が繰り返されることが必要であり、図中に示した上下矢印を行き来するような学びの実現が求められる。その際、特に標準型 A のような学びでは、各学年の学習や発達段階を踏まえた教材コンテンツの果たす役割が重要となる。その開発や収集も今後の欠かせない課題である。

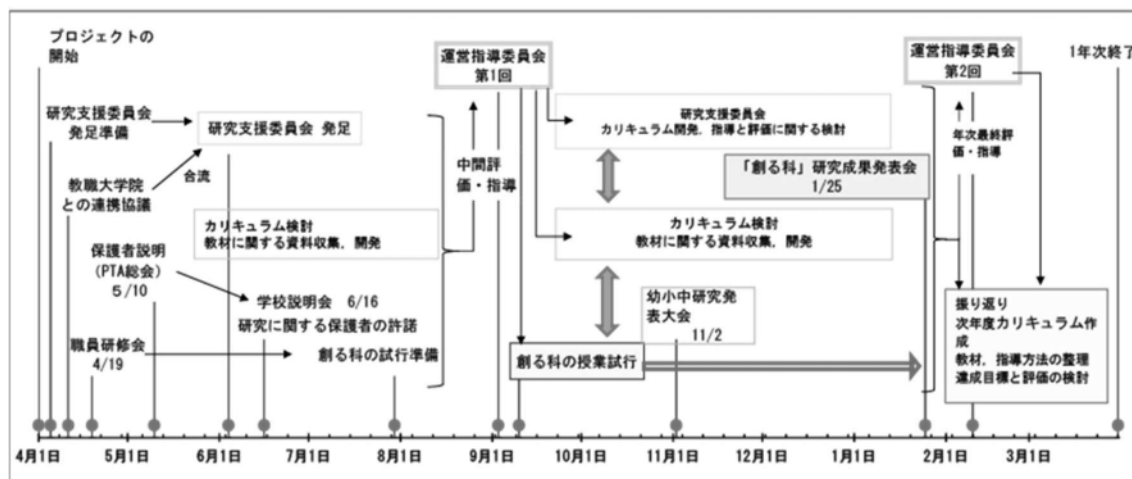
⑦ 「創る科」の年間指導計画

研究 1 年目であることや年間の指導時間を 10 時間（実施目標）と少なく設定していることなどから、今年度は「創る科」の年間指導計画を立てることはせず、図に示す「創る科」初年度タイムラインに沿って授業ならびに研究を進めることとした。年度前半は、カリキュラム検討等の校内研修を通して、「創る科」とはどのような教科で何をを目指すのかといった理解の醸成ならびに研究開発に関わる意義について理解を深めることに重点を置いた。これと並行する形で「創る科」の授業準備を進め、実際の授業は、年度後半から実施することとした。

また年度前半では、充実した研究を実施するための環境整備にも努め、山口大学教育学部ならびに教職大学院との連携を図り、研究支援委員会を立ち上げ、協働による研修会も開催した。さらに、保護者らに対し、本校が研究開発に取り組む意義や子供に与える影響を理解してもらうため、PTA 総会等を通じて説明する機会を設けるようにした。

年度後半では、各学年とも年間 10 時間を目標に「創る科」の授業を試行し、その成果をもとに平成 31 年 1 月 25 日に研究発表会を実施した。

なお、9 月初頭に計画していた第 1 回目の運営指導委員会については、実質的に「創る科」の授業を実施する前で、協議に必要な資料が十分でないことから今年度は開催を見送った。代替として、数回に分けて授業研修会を開催し、その中で適宜指導・助言を受けるようにした。



「創る科」初年度タイムライン

(3) その他

本校では、平成 33 年度を目途に附属幼稚園、附属中学校との幼小中一貫教育（分離型）を目指した作業を同時進行で進めている。この中で、一貫教育カリキュラムの軸をどのようにするかが検討されており、小学校では「創る科」をその候補としている。校種間の接続も視野に入れつつ、今後の研究開発を進めていきたい。

5 研究開発の結果及びその分析

(1) 実施の効果

① 児童・生徒への効果

研究を開始したばかりであり、授業についても部分的な実施に留まることから、現時点で子供への効果を明確にすることは難しい。ただし、授業後に記述された振り返りをみると、子供なりに「創る科」の学びが意図するものを汲み取っており、教科融合型カリキュラムや「創る科」の可能性を期待することができた。以下、「創る科」の授業後に書かれた振り返り（全員分）を整理し紹介する。授業は5年生に実施した標準型授業（45分）で、「工夫して、円形の紙コースターの中心をもとめる」というものである。これまでの学びや経験を生かすことに気付いたり、子供同士が互いの考えを受け入れたりして学びを創っていかうとした様子が伺われる。

【子供の振り返り】

○これまでの学びや経験が生かされる良さ、様々な教科（授業）が繋がる良さに触れた振り返り。（既に学んだことや経験を基に考えることで、教科の概念や学習内容の本質に迫る子供の気付きをみることができる。色々な発想を比較・整理しながら課題解決を図る中でわずかな違いに気付き、それがより深い理解につながったり、新たな着想を生んだりした様子が伺われる。）

- ・ 1つのアイディアをもとに、ほかの折り方はないかななど考えながら見つけると、頭の中にいろいろな発想が出てきて楽しかったです。習ったことも生かしながら授業と授業をつなげながらできました。
- ・ と中でわからなくなってしまっても、そこから発見につながるということに気付いた。今までの知識は色々なことにつながると思った。
- ・ 糸などの新しい使い方を考えることができました。そして、新しいがい念も見つかりました。
- ・ むずかしいけど、できた時にできたという気持ちがある。図工みたいなのと算数の授業がつながっていていいなと思いました。
- ・ むずかしく考え込みすぎていた。でも意外と身の周りにあるものを生かして、考えられるものが多かった。
- ・ 直角や長さ、今まで習ってきた勉強が生かされた。
- ・ 半径は、折っても表せる。
- ・ 円の中心を探すには、直径と半径が関係がある。
- ・ 円の中に四角形や五角形を作ると効率よくできた。
- ・ 2つ目のアイディアの物は、なが四角だったんだけど三角形でやってみたら失敗したから、三角形でできる方法を考えてみたいです。
- ・ 円の中心の書き方はいっぱいあると分かりました。
- ・ 真ん中を見つけるには紙が無いとむずかしいと思いました。でも、糸を使ってみても意外に完成したので、色々な方法がある事に気付きました。
- ・ 失ばいもあったけど正確なまん中がみつけれられてよかったです。と中までは同じでも、次がちがったら他の方法にもなっていたのでびっくりしました。

○仲間との関わり合いの中で、価値を受容したり、評価したりする意味や良さに気付いたと思われる振り返り。（他者の考えや方法を批判しないことをルール化することで、安心して教え合うことができ、子供もそれを肯定的に受け止めている様子が伺われる。一

人一人違って良いことや、友達の考えを取り入れる良さを授業の中で気付けることは、学習活動の中で様々な資質・能力を獲得していくために重要と考えられる。))

- ・ あたらしいやり方を見つけられなかったけど、みんなのやり方をきくと、分かっ
うれしかったです。
- ・ 折り紙などの考えではあまり難しくなくて、少し難しく考えすぎていたのだと思
いました。中心が分からなかったので、今度やるときは友達の考えも使いたいです。
- ・ 円の中心を求めるやり方も、一人一人の考え方の違いで色々なやり方があると分か
った。

○創造的に思考する良さ、達成感に関する振り返り。(一つの発見が次の発見につながる面白さに気付くとともに、この経験を他の学習や事象に生かそうとする姿勢が芽生えている。そのためには、授業の中で適度な負荷を与え、達成感が得られるようにすることが必要なのではないだろうか。)

- ・ 1つの事でもたくさん見方を変えることで、たくさんやり方を見つけることができました。
- ・ このようなことをすることで創造力がみについたり、楽しい方法でいろいろなこと
がみについたから、ほかのことにも生かしたいです。
- ・ 色いろなことに気付けたから、またやりたい。
- ・ 物は無限の可能性を持っていると思った。
- ・ いつもはできない経験ができてよかったです。
- ・ こうやったらできるかもと思ってやってみたことで、中心が分かったときに達成感
を感じました。
- ・ 紙を折らないで円の中心を見つけることはとてもむずかしかったけど、中心が合っ
ていた時はうれしかったです。
- ・ むずかしいけど、できたときの達成感がきもちよかった。

○柔軟に考える大切さに関する振り返り。(決まった正解にたどり着こうとしたり、一つの視点に捉われたりすることによって、思考が働きにくくなっている状態を「むずかしく考える」と表現しているように思われる。逆に「かんたんそうに見えて、むずかしい」という場合、対象の捉え方が曖昧で、具体的かつ論理的な思考ができていないことが考えられる。今後の研究を通じてこれらを明らかにし、「創る科」の指導方法の確立に生かしたい。)

- ・ むずかしく考えずに、やわらかく考えたらわかった。
- ・ とてもむずかしかったけど、時間をかけて、作れたのでよかったです。
- ・ もうすこしかんたんに考えると、2、3通り考えられたんじゃないかなと思いました。
- ・ むずかしく考えるより、かんたんに考えると、もっとたくさんやり方があったな
と思いました。
- ・ 今回の創る科では、最初はずごくむずかしく考えていたけど、いがいとかんたんで、
100とおりがらあるときいて、もっと頭をやわらかくしたら、もっとたくさん
できたなと思いました。
- ・ かんたんそうだったけど、やってみるといがいとむずかしかった。いろいろな中心
の求め方があった。
- ・ かんたんに見えても、いがいにむずかしいんだなと思いました。

② 教師への効果

研究開発に参加する中で、教育政策や学習指導要領の趣旨に関心を向ける教員が増加した。新教科「創る科」にどのような取り組みか考えながら、各教科の指導に取り組むことを通して、結果として教科の特質やそこで何を学ぶのかが明確に意識されつつある。

学校時程の変更は、働き方に対する教員の意識に影響を与え、附属学校の課題であった深夜まで居残る教員の姿は、明らかに減りつつある。新教科を導入することでカリキュラムが肥大化し仕事が増えるのではなく、結果として全体がスリム化されるべきという共通の意識を持てたことは、今年度の大きな成果である。

③ 保護者等への効果

附属学校の性格上、学校が研究開発に取り組むことへの保護者の期待感が高い。一方で、学校時程の見直し等、具体的な変化に対して不安を強く抱く保護者も一定数存在し、機会を捉えて丁寧な説明を行うことが必要となっている。

これに関しては、平成31年1月25日に開催した研究発表会の一部を保護者に開放し、外部講師の講演等を通じて、異なる観点から学校の取組を理解してもらう機会を試行した。参加した保護者からは、「学校の取組に不安を感じていたが、ぜひ応援したい」といった声が聞かれ、対応した教員からも、もっと機会を増やすべきだという積極的な意見が出されている。保護者の意識が、子供の在学中だけでなく、社会の急速な変化に目を向け、その後の将来を見据えた教育の必要性に向き始めたことは重要であり、保護者対象の調査等によってその意識変化等も明らかにしたい。

(2) 指導方法等は適切であったのか

研究初年度で、指導方法等が適切か否かを判断するには十分な資料が得られていないため、上述した授業の3形態を対象に試行を振り返る。

従来、本校が実施してきたフリートークについては、子供の協働性や意見表出能力の向上に効果があるとされる一方、話し合いに方向性がなく一回一回の「言いつ放し」になっているとの指摘も受けてきた。お茶の水女子大学附属小学校では、『てつがく』することを「既知と捉えている事象や概念の意味や価値などに対して“問い”をもち(中略)、自らの考えを広げたり深めたりしていくこと」と捉えているが、今回フリートークを「創る科」の授業として探究の方向性や継続性を持たせることで、同様の効果が伺われる場面をみることができた。先行研究などを参考に、今後「創る科」の主題である価値に迫る『フリートーク型』授業の在り方ならびにその効果に迫りたい。

『教科融合型』授業については、複数の教科に共通する学習内容や題材を「創る科」の授業として実施することで、単なるオムニバスに陥らない指導や学びの深まりが意識されるようになってきたと感じる。これについては、先行する福岡教育大学附属福岡小学校の学習指導要領案試案を参考に、本校の特徴である「創る科」を軸にすることの意味や効果、課題を今後明らかにしていきたい。

「創る科」の柱となる『標準型』授業については、限られた学習時間や環境の中で、価値の創出と受容・評価が行えることが必要であり、どのような教材を通して目指す力を身につけさせるかが重要な研究課題となる。また、この授業形態については、子供のコンピテンシーを高めるための優良なコンテンツが不可欠であるが、現在はこれが圧倒的に不足している。これについては、企業研修や各種自己啓発なども参考にしながら、学校教育として適切なものを開発、収集していく必要がある。

6 今後の研究開発の方向

今後の研究開発の方向としては、「創る科」をコアとした各教科の融合，あるいは幼稚園教育から発して中学校段階までを想定した「創る科」の学びのイメージを基に，カリキュラムや学習内容を具体化し，その効果等を明らかにすることがあげられる。特にカリキュラムに関しては，既存の各教科の内容構成を見直すとともに，「創る科」との関わりを意識しながら，授業時数を含めた全体的な検討を進めたい。

また，「創る科」の創設を軸に「価値」を問う中で，価値とは単に新しい発想や発見ばかりでなく，何を学ぶべきなのか，どうなったら学んだといえるのか，どのように学んだことを生かすのかといった，学ぶ価値を追求していく姿勢が重要であることも気付かされた。学びを振り返り，自覚化させていく中で，最終的にどのような力が育成されるべきなのか，そのためにふさわしい教材や評価を明らかにしていくことも求められる。

以下，今後の研究計画およびその評価方法について，概要を整理する。

【研究計画及び評価方法】

<p style="text-align: center;">第2 年次</p>	<p><計画>○「創る科」を軸とした教科融合型カリキュラムを作成し，その効果や課題を検討する。その際，「創る科」で想定する学びのスパイラルを意識し，低学年においては，連携する幼稚園の協力を得て円滑な接続に必要な具体的な指導や改善，課題等を検討する。同様に高学年についても，連携する中学校との間に協議の機会を設け，「創る科」が果たす役割や意義，教育的な効果等について検討する。</p> <p>○「創る科」の3つの授業形態について，それぞれの特徴や効果，相互の関係性，相応しい教材や指導方法等を検討する。○学びのポートフォリオとして「創る科ノート」を作成し，その記述をもとに，3つの授業形態の効果や課題，「創る科」の系統性を検討する。○「創る科」の指導に必要な教材の開発ならびに収集を行うとともに，教育効果を確認し，「創る科」の指導計画を策定する。</p> <p><評価方法>○運営指導委員会において「創る科」に関わる研究授業などを踏まえた評価を行うほか，幼稚園や中学校教員を交えた合同協議会において，各教科の融合や学校間の接続に関する評価を実施する。○評価指標を作成し，「創る科」学習における自己評価や相互評価を実施する。年間を通じた変化や教師による評価と参照し，評価指標の妥当性，「創る科」授業の効果や課題を明らかにする。○全ての子供を対象に自由記述式アンケートを実施し，「創る科」設置に伴う子供の変容について質的に評価を行う。</p>
<p style="text-align: center;">第3 年次</p>	<p><計画>○前年度までに取り組んだ知見をもとに，その意義や教育的効果について検証し，教育課程や指導方法，教材等を見直す。○教育課程全体を俯瞰し，教科や学年を超えた教育内容の統合整理等を実施し，「創る科」を組み入れた本校独自の指導要領の策定を目指す。○学校種間の接続に関しては，幼稚園や中学校との協議を引き続き実施するとともに，中学校での展開を視野に入れた指導内容，方法の検討を行う。</p> <p><評価方法>○実施3年目であることを踏まえ，学年進行に基づいて子供の意識や態度がどのように変容したのかについて重点的に評価，検討する。○カリキュラム・マネジメントの観点から，学校種間の接続や各教科の融合について有効性を検証する。○保護者の視点からも「創る科」の学習効果を評価する。</p>
<p style="text-align: center;">第4 年次</p>	<p><計画>○「創る科」をコアとした教育課程の編成とその効果について総合的に検証する。○「価値の創出」と「価値の受容と評価」を，教科として取り入れたことによる子供の変容を中心に教育上の意義や効果や課題を整理する。○教育課程編成と指導上の留意点等について，一般化を前提に検討，整理を行う。</p> <p><評価方法>○研究期間全体を通じた最終評価として，全期間を通じた量的，質的評価を実施する。○子供や保護者に対するアンケートを実施し，研究開発の取組が，子供の意識や態度に及ぼした影響を評価する。○「創る科」の内容構成が，子供の発達段階や学校教育課程に照らして適切であったか否かを，総合的に評価する。</p>

○フリートーク型授業

「『心の動かし方』を探ろう」, 6年1組, 授業者: 西村光博, 寺内 健 . . . (1/2)

第 6 学年 創る科 学習指導案

6年1組 指導者 西村光博
寺内 健

単 元 「心の動かし方」を探ろう

1 本単元で創出、受容・評価される価値

問題解決的な学びにおいても活用可能な「心の動かし方」

2 本単元で育成される教科の枠を超えた資質・能力

認知的能力				非認知的能力	
言葉にする力	見極める力	捉える力	試行錯誤する力	開発する力	人とうまくやる力
					おもしろいと感じる力

3 本単元で子どもが価値を創出、受容・評価していくために

本学級の子どもたちは、1年生のときからフリートークに取り組み、仲間の発言を共感的に聞いたり、自分の思いや考えを語ったりすることを楽しんでいる。このような子どもたちが、フリートークを行う際の「心の動かし方」について考える学習に取り組む。このことは、フリートークを行う際に自分たちが無自覚に行っている「心の動かし方」の価値を自覚し、他者の思いに寄り添い、他者と共に、考え、行動していこうとすることにつながるであろう。

本単元は、フリートークを行う際の「心の動かし方」の価値を見出し、その「心の動かし方」が活用可能な場面を考えていく学習である。子どもたちは、自分たちのフリートークを振り返る中で、「心の動かし方」の価値を見出していくであろう。その際、相手や目的に応じた「心の動かし方」を考えることを大切にしたい。そうすることで、価値についての考えを深めることができる考えたからである。

そこで、以下のような支援を具体化する。

- マシュマロテストを例に「心の動かし方」が知識として学習可能であることを示した上で、自分たちのフリートークを振り返る場を設ける。そうすることで、フリートークの際の言動の裏にある「心の動かし方」についても目を向けることができるようにする。
- どの時間も「心の動かし方」と自分のよりよい未来の姿とのつながりが分かるように板書する。そうすることで、「心の動かし方」について考えることの意義を意識しながら話し合うことができるようにする。
- 自分にとって、どの「心の動かし方」を実行してみたいか問う。そうすることで、仲間の考えを参考に「心の動かし方」について見直したり、自分なりにアレンジしたりして考えることができるようにする。

4 本単元の目標

- フリートークを行う際の「心の動かし方」の価値を見出し、その「心の動かし方」が活用可能な場面を考えることができるようにする。
- 無自覚に行っている「心の動かし方」の価値を自覚し、よりよい未来を求めて、考え、行動することができるようにする。

5 本単元における評価規準

知識・技能(知)	思考・判断・表現(思)	主体的に学習に取り組む態度(態)
○フリートークを行う際の「心の動かし方」の価値に気付いている。	○見出した価値ある「心の動かし方」がどのような場面で有効なのか考えている。	○自分にとって価値があると感じた「心の動かし方」を使っている。

6 指導計画 (全5時間)

第1次 学習の見直しをもつ (1時間)

第2次 フリートークを行う際の「心の動かし方」について考える (2時間)

第3次 「心の動かし方」の活用場面について考える (2時間) 【本時1/2】

指導案 1

○フリートーク型授業

「『心の動かし方』を探ろう」, 6年1組, 授業者: 西村光博, 寺内 健 . . . (2/2)

7 本時案 【平成31年 1月25日 13:55~14:40 6年1組教室】

(1) ねらい 英語のフリートークを行う際の「心の動かし方」について考えることをとおして、話し合う際の「心の動かし方」について自分なりの考えをもつことができるようにする。

(2) 学習過程 ※下線は価値を創出、受容・評価している子どもの意識

学習活動・学習内容	子どもの意識	○教師の支援
<p>1 「心の動かし方」を意識して、英語のフリートークを行う。(15分)</p> <p>2 英語のフリートークを振り返り「心の動かし方」について話し合う。(15分)</p> <p>・英語のフリートークを行う際の「心の動かし方」</p>	<p>Aフリートークの時に有効な「心の動かし方」は、英語のフリートークでも使えるのかな。</p> <p>・英語でも誰と誰が同じような考えをもっているのか考えながら聞くぞ。</p> <p>・○君と□さんの考えが繋がっていたよ。</p> <p>A英語を聞き取ろうと必死で「心の動かし方」を考えながら聞くのは難しかったよ。</p> <p>・それに、日本語のフリートークとは違っておたずねが多かったよ。</p> <p>「たしかに、おたずねが多いよね。先生は□さんのおたずねに心が動いたよ。どんな「心の動かし方」をして、おたずねしたのかな。」</p> <p>B自分と比べながら話を聞いたら、おたずねを思い付いたのではないかな。</p> <p>□話している人の言いたいことを分かろうとしたら、おたずねがしたくなったよ。</p> <p>●□さんがおたずねしてくれたから、話したいことを話すことができたよ。</p> <p>・●君が話しやすくなるおたずねだったから</p> <p>●君の考えがより詳しく分かったね。</p> <p>・たしかに。おたずねをしてくれたから、私も●君のことが分かってきたよ。</p> <p>A僕は、相手が話したいことは何かを考えながら聞いて、おたずねを考えてみるよ。</p> <p>「自分と比べたり相手が話したいことを想像したりしながら聞くとおたずねを思いつくだね。日本語でも、その「心の動かし方」は使えそう？」</p>	<p>○前時までに出了「心の動かし方」を含む子どもの発言をベン図にまとめていく。</p> <p>そうすることで、英語と日本語のフリートークの相違点や共通点をもとに「心の動かし方」を考えることができるようにする。</p> <p>○質問をした人、質問をされた人、聞いていた周りの人の気持ちを問うた上で、自分がしてみたい「心の動かし方」を考えるよう促す。そうすることで、おたずねをすることの効果をもつ自分に合った「心の動かし方」を考えることができるようにする。</p>
<p>3 他の場面でも使えそうな「心の動かし方」について話し合う。(15分)</p> <p>・話し合う際の「心の動かし方」</p>	<p>A日本語なら、もっと相手のことを考えたおたずねができると思うよ。</p> <p>・誰と誰の考えが似ているか、どこが違うか比べながら聞くと、国語や算数でもおたずねができそうだよ。</p> <p>・たしかに他の教科でもおたずねができたなら、その人の考えがよく分かるよ。</p> <p>・妥当な考えを求めて話し合う国語の時間にも使えそうな「心の動かし方」だな。</p> <p>B自分と比べたり、仲間の意見とつなげたりして、おもしろがって話を聞ければ、自分とは違う考えも受け入れられそうだよ。</p> <p>A国語や算数の時間に、相手の考えがさらに分かるようなおたずねをしてみたいな。</p>	<p>○フリートークと各教科の学習は、話し合いの目的が異なることを確認した上で「心の動かし方」について考えるように促す。そうすることで、問題解決的な学びの具体的な場面を想像しながら、話し合うことができるようにする。</p>

○教科融合型授業

「定量的・定性的に表すよさ」, 3年1組, 授業者: 森戸 幹 (1/2)

第3学年理科学習指導案

3年1組 指導者 森戸 幹

単元 追究! ゴムの力の働き ~定量的、定性的に表すよさ~

1 本単元で創出、受容・評価される価値

本単元で創出、受容・評価される価値とは、事象を定量的、定性的に表すよさである。定量的に表すとは事象を具体的な数値を用いて表すことであり、定性的に表すとは事象の性質や傾向に重点を置いて表すことである。

2 本単元(題材)で育成される教科の枠を超えた資質・能力

認知的能力				非認知的能力	
言葉にする力	見極める力	捉える力	試行錯誤する力	開発する力	人とうまくやる力 おもしろいと感じる力

3 本単元で子どもが価値を創出、受容・評価していくために

本学級の子どもたちは、「風の力の働き」において、風の強さを変えて風車の回り方などを比較しながら調べることで、風の力が大きくなるほど、物を動かす働きが大きくなるということをつまえることができた。このような子どもたちが、ゴムの力の働きについて学習していく。このことは、加わる力が大きくなるほど、物を動かす働きが大きくなるという「エネルギー」についての見方を深めることにつながるであろう。

本単元は、ゴムの本数や引く長さを変えて、ゴムカーが進む距離を比較しながら調べることで、ゴムの力が大きくなるほど、物を動かす働きが大きくなるということをつまえる学習である。子どもたちは、実験の中でゴムカーが進んだ距離を表やグラフで表していくだろう。このとき、実験の目的に合った結果の表し方を仲間と考えていく場面を設定していきたい。そうすることで、定量的、定性的に表すことのよさや課題について考え、目的に合わせて表し方を選択したり、よりよい結果の表し方を見出したりすることができるようになると考えるからである。

そこで、以下のような支援を具体化する。

- ゴムカーが進んだ距離についてまとめる際には、表に数値を記入したり、グラフにシールを貼ったりする活動を仕組み、それらと比較する場を設ける。そうすることで、それぞれの表し方の違いに着目し、そのよさや課題に気付くことができるようにする。
- 子どもが結果の表し方を選択して発言した際には、その理由を問い返す。そうすることで、定量的、定性的に表すよさを共有することができるようにする。
- 身の回りの表やグラフで表されている事象を提示し、なぜこのような表し方をしているのかを問うことで、定量的、定性的に表すよさを受容・評価することができるようにする。

4 本単元の目標

- ゴムの本数や引く長さを変え、ゴムカーが進む距離を比較する活動を通して、ゴムの力の大きさ変えると、物が動く様子も変わることを理解することができるようにする。
- 仲間と科学的に追究していくよさを感じたり、事象を定量的、定性的に表したりすることができるようにする。

5 本単元における評価規準

知識・技能(知)	思考・判断・表現(思)	主体的に学習に取り組む態度(態)
○ゴムの力の大きさを変えると、物が動く様子も変わることを理解している。 ○ゴムを引いた時の現象の違いについて、手応えなどの体感を基にしながら調べその過程や結果を記録している。	○ゴムを引いた時の物が動く様子を比較してそれらについて予想や仮説をもって表現している。 ○ゴムを引いた時の物が動く様子を比較して、それらを考察し、自分の考えを表現している。	○ゴムの力を働かせた時の現象に興味・関心をもち、進んでゴムの働きを調べようとしている。

6 指導計画(全8時間)

- 第1次 ゴムカーを用いて、「ぴったりカーレース」を行い、学習の見通しを持つ(1時間)
- 第2次 ゴムカーが遠くに進む条件について調べる(5時間)【本時4/5】
- 第3次 学んだことを生かして、「ぴったりカーレース2」を行う(2時間)

指導案 2

○教科融合型授業

「定量的・定性的に表すよさ」, 3年1組, 授業者: 森戸 幹 (2/2)

7 本時案 【平成31年1月25日 13:00~13:45 理科室】

- (1) ねらい 実験結果の表し方のよさや課題について話し合う活動を通して、定量的、定性的に表すよさを受容・評価することができるようにする。
- (2) 学習過程 ※下線は価値を創出、受容・評価している子どもの姿

学習活動・学習内容	子どもの意識	○教師の支援
<p>1 これまでの実験結果の表し方のよさや課題について話し合う。(10分)</p> <p>・実験結果の表し方の比較</p>	<p>A ゴムカーが進んだ距離を表に表していくと何m進んだのかが詳しく分かるね。</p> <p>・でも、記録がたくさんがあると見にくいよ。</p> <p>B ゴムカーが進んだ距離をグラフで表すと表ほど詳しくは分からないけど、一目でゴムカーがどれだけ進んだのかが分かるね。</p> <p>・二つの結果の表し方にはそれぞれよいところと分かりにくいところがあるね。</p>	<p>○これまでの実験結果を提示し、比較するよう促す。そうすることで、それぞれの表し方の違いに着目し、そのよさや課題に気付くことができるようにする。</p>
<p>2 既習を生かした実験を行い、その結果の表し方について考える。(20分)</p> <p>・ブロックの重さの比較</p> <p>①鉄: 313g ②アルミニウム: 136g ③塩化ビニル: 69g ④ゴム: 64g ⑤ポリエチレン: 40g ⑥木: 19g</p>	<p>「それぞれの表し方のよさを生かして、以前、学習した同じ体積のブロックの重さ比べの結果の表し方を考えてみよう。」</p> <p>B グラフで重さを表せば、一目でブロックごとの重さの違いが分かると思うよ。</p> <p>・確かに、6つも比べるものがあるのだからグラフで表した方がどれが重いのか分かりやすいよ。</p> <p>・ブロックの重さをグラフで表してみよう。</p> <p>B グラフで表すと鉄が他と比べてすごく重たいということがよく分かるね。</p> <p>A だけど、塩化ビニルとゴムは同じ場所にシールが貼ってあるよ。</p> <p>B そうか。これでは、塩化ビニルとゴムは同じ重さに見えてしまうね。</p> <p>A 素材ごとの重さの違いを分かりやすくするには表で表すといいね。</p> <p>B グラフでも、もっと目盛りを細かくすれば、細かい違いも分かるようになると思うよ。</p> <p>A そうだね。そうすれば、一目で細かい違いまで分かるグラフになりそうだね。</p>	<p>○子どもが結果の表し方を選択して発言した際、その理由を問い返す。そうすることで、定量的、定性的に表すよさを共有することができるようにする。</p> <p>○実際にブロックの重さを量り、自分が思うよりよい表し方で結果を表す場を設定する。そうすることで、自分の思う表し方が目的に合っているかどうかを確認することができるようにする。</p>
<p>3 身の回りの事象の表し方について話し合う。(15分)</p> <p>・身の回りの事象の表し方</p>	<p>「表し方にはそれぞれのよさがあるのだね。では、身の回りのこのような場面の表し方にはどのようなよさがあるのかな。」</p> <p>・天気予報では1日の気温をグラフで表しているね。</p> <p>B これなら一目で、気温がどのように変わっていくのかが分かるね。</p> <p>・だけど、これでは詳しい気温がよく分からないよ。</p> <p>・気温を1時間ごとに記録したものもあるそうだよ。同じ気温でも表し方が全然違うね。</p> <p>A 詳しく気温が知りたいという場合はこちらの方を見るといいね。</p> <p>B 何を伝えたいのかをよく考えて、よりよい表し方を選んでいいのだね。</p>	<p>○身の回りで表やグラフを用いて表している事象を提示し、なぜこのような表し方をしているのかを問うことで定量的、定性的に表すよさを受容・評価することができるようにする。</p>

○教科融合型授業

「分数で考える1の価値」, 3年2組, 授業者: 岡本貴裕 (1/2)

第3学年算数科学習指導案

3年2組 指導者 岡本貴裕

単元 分数で考える1の価値

1 本単元で創出、受容・評価される価値

ものの個数を数えたり、ものの順序を表したりする際に自然数として初めて出会う1という数。子どもたちの学ぶ1の価値は、学びの文脈によって様々であり、低学年から高学年へと学年が進むにつれて変化していく。本単元での1の価値は、基準量の1を考えていく中で、全体と部分の関係を捉えることである。このことは、将来、広い視野をもって解決困難な問題に向き合う力の育成にも寄与するものと考ええる。

2 本単元で育成される教科の枠を超えた資質・能力

認知的能力					非認知的能力	
言葉にする力	見極める力	捉える力	試行錯誤する力	開発する力	人とうまくやる力	おもしろいと感じる力

3 本単元で子どもが価値を創出、受容・評価していくために

本学級の子どもたちは、分数や割合の学習の素地として、もとの大きさを等分割した大きさを簡単な分数で表現してきている。そのような子どもたちが、量分数や単位分数等の意味や表し方について学んでいく。このことは、分数の概念を形成し、数についての感覚を豊かにすることにつながるであろう。

本単元は、基準量の1について追究していく学習である。中学年の段階において、子どもは、基準量の1を意識することで、分数の意味や表し方等についての理解を深め、分数で表現することのよさに気付いていくであろう。その際、明示されていない基準量の1から分数で表現する場を設定する。そうすることで、全体と部分の関係に着目して物事を考え、問題解決していくことにつながると考えるからである。また、今後、他教科や他領域においても全体と部分の関係を捉えながら学習し、広い視野をもって問題解決していくことができるようにしたい。

そこで、以下の支援を具体化し、本単元で子どもが価値を創出、受容・評価していくことができるようにする。

- 単元導入において、外郎全体の大きさを曖昧にした問題を提示する。そうすることで、全体の大きさを想像し、4つに等分割しようとするようにする。
- 子どもが分数で表現した際、理由を問い返す。そうすることで、基準量の1を意識して分数で捉えることができるようにする。
- 子どもが分数の表し方に違いを見取った際、それぞれの表し方を再現するよう促す。そうすることで、基準量の1から分数で表現していることに気付くことができるようにする。

4 本単元の目標

- 分数の意味や表し方、簡単な計算方法について知り、分数の大きさを比べたり、計算したりする方法を見いだすことができるようにする。
- 基準量の1を意識して分数で表現することのよさに気付くことができるようにする。

5 本単元における評価規準

知識・技能(知)	思考・判断・表現(思)	主体的に学習に取り組む態度(態)
○分数の意味や表し方、簡単な計算方法について知る。	○分数の大きさを比べたり、計算したりする方法を見いだす。	○基準量の1を意識して分数で表現しようとしている。

6 指導計画(全8時間)

- 第1次 全体と部分の関係について考える(1時間)【本時1/1】
- 第2次 量分数や単位分数の意味や表し方について考える(4時間)
- 第3次 簡単な分数の大きさを比べたり、計算の仕方について考えたりする(3時間)

指導案 3


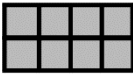
○教科融合型授業

「分数で考える1の価値」, 3年2組, 授業者: 岡本貴裕 (2/2)

7 本時案 【平成31年1月25日 13:00~13:45 3年2組教室】

(1) ねらい 全体を1としたときの部分の大きさを話し合う活動をとおして、全体と部分の関係について考えることができるようにする。

(2) 学習過程 ※下線は価値を創出、受容・評価している子どもの意識

学習活動・学習内容	子どもの意識	○教師の支援
<p>1 外郎1本の4分の1の大きさについて考える。 (20分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 基準量の1(全体の大きさ)を捉えること 部分の基準量の1(全体の大きさ)に対する割合的な見方 	<ul style="list-style-type: none"> 置き手紙に、「外郎を4分の1食べてもよい」と書いてあるよ。 4分の1はこのあたりかな。 A ぼくもそのあたりに線を引いたよ。だって、4等分するとそうなるからね。 B えっ、それだけだと少ないと思うな。わたしは、外郎の見えない部分がまだあると思うから、もう少し食べてもよいと思うよ。 外郎全体の大きさはどのくらいなのかな。 全体の大きさが分かると4分の1の大きさも分かりそうだな。 A 外郎の大きさによって、4分の1の大きさが変わってくるのかな。 <p>外郎1本の大きさによって、4分の1の大きさが変わるのだね。だったら、同じ大きさの外郎を増やしても4分の1の大きさは変わらないね。</p>	<p>○外郎全体の大きさを曖昧にした図を提示し、4分の1の大きさを問う。そうすることで、外郎1本分の大きさを想像し、4つに等分割しようとすることができるようにする。</p> <p>○子どもが4分の1の大きさについて発言した際、考えの理由を問い返す。そうすることで、全体の大きさを意識して4分の1の大きさを捉えようとするようにする。</p>
<p>2 外郎の数を増やして、4分の1の大きさについて考える。 (20分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 基準量の1(全体の大きさ)の拡張 基準量の1(全体の大きさ)拡張に伴う部分の大きさの変化 	<ul style="list-style-type: none"> うん、変わらないよ。4分の1の大きさはそのままだよ。 C そうだよ。外郎1本の大きさは変わらないから、4分の1の大きさも変わらないよ。 B いや、変わるよ。4分の1の大きさが大きくなるから、もっと食べられると思うよ。 たしかに。だって、2本に増えるから、4分の1の大きさも2倍に増えるはずだよ。 A 1本の時と同じように、実際に4等分してみると分かるのではないかな。 あっ、やはり2本にすると、1本の時の大きさの2倍の大きさになっているよ。 C 全体の大きさが増えたから、4分の1の大きさも、大きくなるのか。 本当だ。自分がかいた外郎でも同じことが言えるよ。 全体の大きさによって4分の1の大きさが変わっておもしろいな。 <p>外郎だから全体の大きさによって4分の1の大きさが変わるのだね。</p>	<p>○同じ大きさの外郎を増やし、4分の1の大きさについて図を使って説明するよう促す。そうすることで、全体の大きさを拡張すると、部分の大きさも拡張されることに気付くことができるようにする。</p> <p>○全体と部分の関係について考えることによさにつながる発言を見取り、紹介する。そうすることで、生活経験を全体と部分の関係から捉え直すことができるようにする。</p>
<p>3 学習を振り返る。 (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 全体と部分の関係を捉える力 	<ul style="list-style-type: none"> A 違うよ。持久走大会で走る距離も学年によって4分の1の大きさが変わるよ。 そうだね。中学年になると走る距離が伸びたから、4分の1の距離も増えたね。 他にも、全体の大きさによって4分の1の大きさが変わるものがありそうだな。 	

○標準型 A

「学びや経験を基に考える」, 5年1組, 授業者: 岡村吉永, 大賀拓也 . . . (1/2)

第 5 学 年 創 る 科 学 習 指 導 案

5年1組 指導者 大賀拓也
岡村吉永

単 元 学 び や 経 験 を 基 に 考 え る

1 本単元で創出、受容・評価される価値

創出される価値とは、基礎となる学びや経験に基づく気づき（発見）と、そこから生み出される考え（創出）であり、受容・評価とは、そうした考えを自他で認め合い（受容）、よりよいものとするための活動（評価）である。本単元では、一連の価値に触れる具体的な学習活動を通して、既習事項や日常の経験の大切さ、価値を創出するために欠かせない発想することのよさに気付かせたい。

2 本単元で育成される教科の枠を超えた資質・能力

認知的能力					非認知的能力	
言葉にする力	見極める力	捉える力	試行錯誤する力	開発する力	人とうまくやる力	おもしろいと感じる力

3 本単元で子どもが価値を創出、受容・評価していくために

子どもたちは、本単元で扱う図形（円）を算数科で既に学習しており、日常生活の様々な場面でも目にし、触れている。しかし、完成済みの円から中心を求めたことはなく、手順が逆になることで既習事項の活用が困難となり、工夫し試行錯誤的に解決を図らなければならなくなる。自分なりの答えを得たいという一方で、どう考えたらよいか戸惑う場面も予想される。

本単元の解法は、単純なものから高度なものまで多様に存在する。解法を得ようとする中で、子どもたちには、対象に向き合い自分なりの糸口を見出すこと、試行錯誤しながら発想を具体化することが求められる。そして、試行錯誤し発想を具体化する段階では、他者と向き合い意見交換することや得られた解法のよさを評価し、これをさらに工夫し発展させていく力も必要となる。こうした活動を通して、子どもたちは、発想や工夫は、これまでの学びや経験に基づいており、互いの考えを持ち寄ることでよりよいものになることに気付くだろう。すなわち、発想は突然舞い降りてくるものではなく、そのための取組が必要であることや、その行為自体がおもしろいものであることを意識させたい。

そこで、以下の支援を具体化し、創る科の学習で期待される子どもの姿を実現させたい。

- 学習の意義や、授業に臨む構えとルールを明示する。そうすることで、互いに考えを表出しやすい支持的な雰囲気を作ることができるようにする。
- 偏心したルーレットを示し、その問題点を問う。そうすることで、学習課題を明確にし、円の中心を求めようと主体的に取り組むことができるようにする。
- 得られた発想や工夫を次の学習にどの様に生かすかを考えるよう促す。そうすることで、これまでの学びや経験の大切さに気づき、価値の創出と受容・評価を自分事として捉えることができるようにする。

4 本単元の目標

- これまでの学びや経験を基に対象を観察し、自分なりの解法を考えたり工夫したりできるようにする。
- 創造的に考えることや協働を通して、日ごろの学びや経験を大切に、発想することのよさに気付くことができるようにする。

5 本単元における評価規準

知識・技能(知)	思考・判断・表現(思)	主体的に学習に取り組む態度(態)
○他教科での学びや経験を生かしている。	○発想や工夫を仲間に分かりやすく伝えている。 ○効率や精度などを基に解法のよさを評価している。	○価値の創出と受容・評価を自分事として捉え、進んで取り組もうとしている。

指導案 4

○標準型 A



「学びや経験を基に考える」, 5年1組, 授業者: 岡村吉永, 大賀拓也 . . . (2/2)

6 指導計画 (全2時間)

第1次 中心を見付けよう (2時間) 【本時1/2】

7 本時案 【平成31年1月25日 13:00~13:45 5年1組教室】

- (1) ねらい これまでの学びや経験を基に、仲間との協議を通して解法を見付ける中で、発想することや工夫することのよさに気付くことができるようにする。
- (2) 学習過程 ※下線は価値を創出、受容・評価している子どもの意識

学習活動・学習内容	子どもの意識	○教師の支援
<p>1 学習の意義や活動に必要な心構え、ルールを知る。(5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 取組への意欲 支持的雰囲気 	<ul style="list-style-type: none"> 今日は、「閃き」や「思い付き」を形にする学習をするのか。 難しそう。でもおもしろそうだ。 A 間違っていたら恥ずかしいな。でもルールがあると、安心して意見が言えそうだ。 <p>紙コースターで作ったルーレットがうまく回らない。何が原因だろうか。</p> 	<p>○学習の意義とそのために必要な心構えやルールを明示する。そうすることで、互いに考えを表出しやすい支持的な雰囲気を作ることができるようにする。</p>
<p>2 課題を把握し、取り組む。(30分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 既習事項の活用 円の中心の求め方 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>支持的な雰囲気を作るためのルール例 「変だ、おかしい」は使わない。 ↓ 「すごい、おもしろい」に言い換える。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ルーレットに必要なことは何だろうか。 バランスよく回るためには、円の中心が必要だよ。 コンパスで円は描けるけど、逆に中心を求めるにはどうしたらよいだろうか。 コンパスや三角定規を使えばよいのかな。 ○○君の方法はちょっと変だぞ。こういう時は「すごいね」と言うのだったな。 A どこから考えたらよいのだろう。 B 答えはたくさんあるようだから、いっぱい見付けたいな。 <p>友だちが見付けた方法を紹介します。どうして、このように考えたのかな? 発想をどのように生かしたのかな?</p>  <ul style="list-style-type: none"> 私とは違う方法を考えている人がいるな。 ○○さんの方法は、簡単でよいな。 △△さんの方法は、正確そうだな。 B なるほど、そういう方法もあるのだね。もっと工夫できないかな。 	<p>○偏心したルーレットを示し、その問題点を問う。そうすることで、学習課題を明確にし、円の中心を求めようと主体的に取り組むことができるようにする。</p> <p>○友だちに尋ねたり、紹介したりする中で互いの考えをたどるよう促す。そうすることで、基点となる発想(着想)の大切さや工夫の意味に気付けるようにする。</p>
<p>3 学習を振り返り、整理と評価を行う。(10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 発想や工夫のよさ 取組のよさ 	<ul style="list-style-type: none"> A いろいろな方法を考えるって楽しいな。また、やってみたいな。 身の回りの工夫についても知りたいな。 ちょっとした工夫で、精度や効率がよくなるっておもしろいな。 協力するとたくさんの方が思い付くね。 B これまでに学習したことを上手く生かすようにしたいね。 	<p>○得られた発想や工夫を次の学習にどのように生かすかを考えるように促す。そうすることで、これまでの学びや経験の大切さに気付き、価値の創出と受容・評価を自分事として考えることができるようにする。</p>

○標準型B

「探究的な学習の価値を問う」, 4年2組, 授業者: 小林弘典 (1/2)

第4学年創る科学習指導案

4年2組 指導者 小林弘典

単元 探究的な学習の価値を問う

1 本単元で創出、受容・評価される価値

以下のような、探究的な学習の価値の、特に①と③を創出、受容・評価できるようにしたい。

- ①事象を捉える感性や問題意識が揺さぶられて、学習活動への取組が真剣になる。
- ②身に付けた知識及び技能を活用し、その有用性を実感する。
- ③見方が広がったことを喜び、更なる学習への意欲を高める。
- ④概念が具体性を増して理解が深まる。

2 本単元で育成される教科の枠を超えた資質・能力

認知的能力					非認知的能力	
言葉にする力	見極める力	捉える力	試行錯誤する力	開発する力	人とうまくやる力	おもしろいと感じる力

3 本単元で子どもが価値を創出、受容・評価していくために

本学級の子どもたちは、総合学習において、地域の川で魚捕りを行い、地域の川の豊かさを実感し、魚の棲むきれいな川を守りたいという思いをもって、環境保全について探究的に学習を進めている。このような子どもたちが、探究的な学習の価値について考えていく。このことは、今後も様々な場面で探究的な学習を進めていこうとする態度を養うことにつながるであろう。

本単元は、総合学習をもとに、探究的な学習の価値について考えていく学習である。子どもたちは、問題解決の過程を振り返る中で、探究的な学習の価値を見出していくであろう。その際、探究的な学習が学習全般や生活と深く関わっていることへの気付きをもとに話し合うことを大切にしたい。そうすることで、探究的な学習の価値を受容・評価することができるからである。

そこで、以下のような支援を具体化する。

- 探究的な学習の過程における振り返りに関する発言があった際には、その良さを問う。そうすることで、自分たちが問題解決的な学習を発展的に繰り返してきたことに気付くことができるようにする。
- 総合学習の過程を振り返る中で、価値に迫る発言があった際には、写真や振り返りの記述をもとに話すよう促す。そうすることで、体験を思い出しながら、自分事として考えることができるようにする。
- 他教科の具体的な場面に関する発言があった際は、総合学習での探究的な学習のどこに当たるのかを問い返す。そうすることで、探究的な学習が学習全般や生活と深く関わっていることに気付くことができるようにする。

4 本単元の目標

- 探究的な学習の価値を見出し、探究的な学習が活用可能な場面を考えることができるようにする。
- 今後も様々な場面で探究的に学習を進めようとするようにする。

5 本単元における評価規準

知識・技能(知)	思考・判断・表現(思)	主体的に学習に取り組む態度(態)
○探究的な学習の価値について気付いている。	○探究的な学習が活用可能な場面について考えている。	○様々な場面で探究的に学習を進めようとしている。

6 指導計画(全2時間)

第1次 総合学習をもとに、探究的な学習の価値について考える(1時間)【本時】

指導案 5

○標準型 B

「探究的な学習の価値を問う」, 4年2組, 授業者: 小林弘典 (1/2)

第2次 探究的な学習が活用可能な具体的な場面について考える (1時間)

7 本時案 【平成31年1月25日 13:55~14:40 4年2組教室】

(1) ねらい 総合学習をもとに、探究的な学習の価値について考え、探究的な学習が活用可能な場面について見通しをもつことができるようにする。

(2) 学習過程 ※下線は価値を創出、受容・評価している子どもの意識

学習活動・学習内容	子どもの意識	○教師の支援
<p>1 総合学習をもとに、探究的な学習の価値について考える。(30分)</p> <p>・探究的な学習の価値</p>	<p>・総合の良さを探して、他の教科に生かせるらもっと楽しくなりそうだね。</p> <p>・バスで川に行ったことが楽しかったね。</p> <p>A 魚を捕まえたことが楽しかったな。</p> <p>・川での体験をすることで、魚のことや川のこと、漁協のことを知ることができたよ。</p> <p>・前期は魚捕りをしてきたけど、きれいな川を守りたいという思いが生まれて、ゴミ拾いをしていることがよかったな。</p> <p>A 魚捕りからゴミ拾いへと、学習が変わってきているよね。</p>	<p>○振り返りに関する発言があった際には、振り返りの良さを問う。そうすることで、自分たちが問題解決的な学習を発展的に繰り返してきたことに気付くことができるようにする。</p>
<p>総合学習で、みんなの学習が変わってきたのは、学習をどのように進めてきたからなのかな。</p>	<p>B 実際に活動して気付いたことをもとに、振り返りをしているから、学習が変わっているのだと思うよ。</p> <p>A そういえば、○くんがあの時、きれいな川を守るためにゴミ拾いをしようと言ったから、ゴミ拾いを始めたのだったね。</p> <p>・振り返り、次の計画、活動と繰り返すことで、深まっている気がするよ。</p> <p>・これからも繰り返しながら学習していきたいな。このような学び方を探究的な学習というのだから。</p> <p>・探究的な学習は、自分たちで計画をするから、やってみたくことがつながっていくね。</p>	<p>○誰のどの発言で活動が変わったかを問い返す。そうすることで、探究的な学習の具体を捉えることができるようにする。</p> <p>○児童の発言をもとに、総合の学習過程をスパイラル状に板書上で示し、今後も継続していくのかを問う。そうすることで、俯瞰して学習過程を捉え直すことができるようにする。</p>
<p>自分たちで計画を考えて、やってみたくことがつながっていく学習が、他の教科でもできないかな。</p> <p>2 総合学習以外で、探究的な学習を行う場面について考える。(15分)</p> <p>・探究的に学ぶ場面</p> <p>・次時への見通し</p>	<p>・いいね。それ。なんだか楽しそうだよ。</p> <p>・他の教科でも、振り返りをもとに次に調べたいことや、試してみたいことを計画することはできると思うよ。</p> <p>B 理科は1つの単元で、<u>予想、実験、考察を繰り返しているよ。予想は計画、実験は活動、考察は振り返りに似ているよ。</u></p> <p>A 国語や社会も学習計画を考えているけど、<u>振り返りでの気付きの交流をもとに次の計画をすれば、もっと楽しくなりそうだね。</u></p> <p>・次の時間は、実際に他の教科でも探究的な学習ができないか、みんなで考えたいな。</p>	<p>○他教科の具体的な場面に関する発言があった際には、総合学習での探究的な学習のどこに当たるのかを問い返す。そうすることで、探究的な学習が学習全般や生活と深く関わっていることに気付くことができるようにする。</p>

○標準型 B

「6年間の学びを生かして ～感謝の気持ちを「和」で伝えよう～」，

6年2組，授業者：重枝孝明 ・ ・ ・ ・ （1/2）

第 6 学 年 創 る 科 学 習 指 導 案

6年2組 指導者 重枝孝明

単 元 6年間の学びを生かして～感謝の気持ちを「和」で伝えよう～

1 本単元で創出、受容・評価される価値

本単元で創出、受容・評価される価値は、これまでの学びを生かすことによさである。これまでの学びの中心となるものは、6年間の学習における各教科等の見方・考え方や獲得した知識及び技能である。

2 本単元で育成される教科の枠を超えた資質・能力

認知的能力				非認知的能力	
言葉にする力	見極める力	捉える力	試行錯誤する力	開発する力	人とうまくやる力
					おもしろいと感じる力

3 本単元で子どもが価値を創出、受容・評価していくために

本学級の子どもたちは、6年間の学習において、各教科等の見方・考え方を働かせ、知識及び技能を獲得してきた。このような子どもたちが、お世話になった人たちに感謝の気持ちを「和」で表現する学習に取り組む。このことは、これまでの学びを生かして問題を解決することのよさを自覚し、これからの学習や人生においても、学びを生かして物事に取り組んでいこうとする態度を養うことにつながるであろう。

本単元は、卒業を目の前にした子どもたちが、「和」をテーマにして謝恩会を企画し、実行していく学習である。謝恩会を企画していく中で、子どもたちは、感謝の気持ちを「和」で表現するためにはどのようにすればよいか考えていくであろう。その際、これまでに学習した各教科等の見方・考え方を働かせたり知識及び技能を用いたりして、感謝の気持ちを「和」で表現する方法を考えることを大切にしたい。そうすることで、これまでの学びを生かして問題を解決することのよさを自覚することができるからである。

本単元を進めるにあたって、以下の手立てを重視する。

- 各係で企画内容について話し合う「係会議」の後、学級全体で検討する「提案会議」、そして再度「係会議」を行うという単元構成を仕組む。そうすることで、自分たちでは気付かなかった視点を取り入れ、内容をよりよいものにすることができるようにする。
- 「提案会議」の中で、聞く側が各係から提案された内容について意見を言う際には、その理由についても発言するように促す。そうすることで、これまでの学びと結びつけながら内容について考えることができるようにする。
- 板書や自分のノートを手がかりに、1単位時間や単元を通しての学習をふり返るように促す。そうすることで、学びを生かすことのよさを自覚することができるようにする。

4 本単元の目標

- 各教科等の見方・考え方、知識及び技能などを生かして、感謝の気持ちを「和」で表現することができるようにする。
- これまでの学びを用いて問題を解決することのよさを自覚し、これから、それらを生かして物事に取り組んでいこうとする態度を養うことができるようにする。

5 本単元における評価規準

知識・技能(知)	思考・判断・表現(思)	主体的に学習に取り組む態度(態)
○感謝の気持ちを「和」で表現するために、これまでの学びを生かしている。	○各教科等の見方・考え方、知識及び技能などを生かして、感謝の気持ちを「和」で表現する方法を考えている。	○感謝の気持ちを「和」で表現する方法に関心を持ち、よりよい方法を追究しようとしている。

6 指導計画（全13時間）

- 第1次 謝恩会のテーマと主な内容を考え、学習の見通しをもつ（2時間）
- 第2次 謝恩会の企画をする（7時間）【本時 4/7】
- 第3次 謝恩会を行う（3時間）
- 第4次 学習をふり返る（1時間）

指導案 6

○標準型 B

「6年間の学びを生かして ～感謝の気持ちを「和」で伝えよう～」,

6年2組, 授業者: 重枝孝明 (2/2)

7 本時案 【平成31年1月25日 13:55~14:40 6年2組教室】

(1) ねらい 料理係の提案内容を検討する活動を通して、これまでの学びを生かして感謝の気持ちを「和」で表現する方法を考えることができるようにする。

(2) 学習過程 ※下線は価値を創出、受容・評価している子どもの意識

学習活動・学習内容	子どもの意識	○教師の支援
<p>1 謝恩会の内容について料理係が提案する。(10分)</p> <p>・料理係の提案の内容や意図</p>	<p>A 料理係では謝恩会の料理として、おにぎりとおみそ汁を出すことを考えています。家庭科で学習したし、日本の文化にもなっているからです。</p> <p>・おにぎりの具は、定番の梅干しにします。</p> <p>・みそ汁は少し甘味を出すために、実を揚げとたまねぎにしようと思っています。</p>	<p>○料理係に内容とともに意図を説明しながら提案するように促す。そうすることで、聞いている側が、料理係が考えている視点を意識することができるようにする。</p>
<p>2 料理係の提案内容を検討する。(30分)</p> <p>・これまでの学びを生かした様々な視点(地産地消、色、形、日本の文化など)</p>	<p>「これまでに学んだことを生かして、いろいろな視点で料理係の提案内容について考えてみよう。」</p> <p>・おにぎりの具は、萩のしそわかめはどうか。地産地消で、先生方も好きだと思うよ。</p> <p>B 家で考えたことなのだけど、その日は金曜日だから、給食はご飯だよ。</p> <p>・料理係は、どのくらいのおにぎりを考えているのかな。給食でご飯を食べているから、量は少なくともよいと思うよ。</p> <p>・それなら、一口サイズのてまりむすびのようにしたらどうか。</p> <p>A それなら食べられるし、形もかわいいね</p> <p>C そうだ、ふりかけをかけると色もきれいに見えるのではないかな。</p> <p>・黄色とかピンクのふりかけがいいかな。卒業の感じが出ると思うよ。日本の「春」をイメージしてね。</p> <p>B 給食で先生方はお腹がいっぱいだと思うから、謝恩会ではデザートを出してもよいと思うよ。</p> <p>・それならいろいろはどうか。「和」のテーマにも合うし、総合の学習の経験があるから自分たちで作れるよ。</p> <p>・いろいろにするのなら飲み物は緑茶がよいね。おいしいお茶を入れてあげたいな。</p> <p>「黒板やノートなどをもとに今日の提案会議をふり返ってみよう。料理係さんは、みんなで検討してみよう。」</p>	<p>○提案資料を事前に配布し、提案内容について考えてくることを家庭学習にする。そうすることで、自分の考えをもって会議にのぞむことができるようにする。</p> <p>○聞く側が各係から提案された内容について意見を述べる際には、その理由についても発言するように促す。そうすることで、これまでの学びと結びつけながら内容について考えることができるようにする。</p> <p>○検討内容を視点別に整理して板書に示す。そうすることで、これまでに学んだことの複数の視点から、感謝の気持ちを「和」で表現する方法を考えることができるようにする。</p>
<p>3 本時の学習をふり返る。(5分)</p> <p>・これまでの学びを生かすことのよさ</p>	<p>A 自分たちでは思いつかなかった考えが出てきたよ。デザートにするのもいいね。いい料理になりそう。提案してよかったな。</p> <p>・黒板を見てみると、これまでに学んだ皆さんの視点で考えていて、提案したことが深まっていることが分かるよ。</p> <p>D 色についての視点は自分たちにはなかったな。会場づくりに取り入れてみたいな。</p>	<p>○板書や自分のノートを手がかりに学習をふり返るよう促す。そうすることで、学びを生かすよさを自覚することができるようにする。</p>

前期と後期の学校時程比較（詳細） 月・火・水曜日

網掛け部分を削減

平成30年度 後期 各学級日課一覧表（月・火・水）

Table with columns for class (A/B), subject, and time slot. Includes a shaded area for the period 13:55-14:20.

Table with columns for class (A/B), subject, and time slot. Includes a shaded area for the period 13:55-14:20.

Table with columns for class (A/B), subject, and time slot. Includes a shaded area for the period 13:55-14:20.

平成30年度 前期 各学級日課一覧表（月・火・水）

Table with columns for class (A/B), subject, and time slot. Includes a shaded area for the period 13:55-14:20.

Table with columns for class (A/B), subject, and time slot. Includes a shaded area for the period 13:55-14:20.

Table with columns for class (A/B), subject, and time slot. Includes a shaded area for the period 13:55-14:20.

資料1

前期と後期の学校時程比較（詳細） 木・金曜日 網掛け部分を削減

平成30年度 後期 各学級日課一覧表（木・金）

学年	1学期		2学期		3学期		4学期		5学期		6学期	
	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時
M	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式
	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会
	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語
	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数
	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科
	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育
	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽
木	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式
	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会
	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語
	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数
	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科
	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育
	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽

平成30年度 前期 各学級日課一覧表（木・金）

学年	1学期		2学期		3学期		4学期		5学期		6学期	
	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時	日	時
M	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式
	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会
	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語
	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数
	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科
	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育
	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽
木	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式	8:30	開校式
	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会	9:15	朝会
	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語	9:40	国語
	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数	10:10	算数
	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科	10:40	理科
	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育	11:10	体育
	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽	11:40	音楽

■ ①の枠が抜けました。
 ■ 非常勤講師の担当科目をできる限り改めて配置し、空席調整ができるようにしました。
 ■ 上記の調整で、多少、授業科目が重複しているところがあるのはご了承ください。
 ■ 体育は、学年で同じ時間帯に組み、運動場と体育館が混みあっても構いません。
 ■ 休日にあっても、準備、片付けの範囲が50分程度の専科授業を配置していません。

■ ①の枠が抜けました。
 ■ 非常勤講師の担当科目をできる限り改めて配置し、空席調整ができるようにしました。
 ■ 上記の調整で、多少、授業科目が重複しているところがあるのはご了承ください。
 ■ 体育は、学年で同じ時間帯に組み、運動場と体育館が混みあっても構いません。
 ■ 休日にあっても、準備、片付けの範囲が50分程度の専科授業を配置していません。

教科で育成する力に関するアンケート用紙（因子分析用）

創る科に関するアンケート

以下に示された教科に、下に挙げた力は必要だと思いますか。1（全くそう思わない）～6（とてもそう思う）の中からあてはまるものに○をつけてください。

教科名 ()		必要な力					
		全く そう 思わない	2	3	4	5	6
1	多面的・多角的に考える力						
2	他者の考えを受容する力						
3	自分事で考える力						
4	自己を見つめる力						
5	言語感覚(?)						
6	場面や相手に応じて言葉を選ぶ力						
7	情報を処理する力						
8	批判的思考力						
9	論理的思考力						
10	比較する力						
11	関連付ける力						
12	妥当性を探る力						
13	発展的に考えるする力・応用する力						
14	問題を見出す力						
15	選択・判断する力						
16	試行錯誤する力						
17	気付く力						
18	情報収集する力						
19	先を見通す力						
20	解決方法を考える力						
21	構想する力						
22	発想する力						
23	体全体の感覚を働かせる力						
24	他者に伝える力						
		1	2	3	4	5	6
1	道徳性						
2	人とつながろうとすることができる						
3	互いに思いやることができる						
4	地域(国民・国際社会)の一員としての自覚をもつことができる						
5	自己理解・他者理解することができる						
6	協働することができる						
7	主体性						
8	対象に対する愛情						
9	喜びを味わうことができる						
10	没入・没頭することができる						
11	生涯にわたって親しむことができる						

2030年予測困難な時代を生き抜くために必要だと思われる資質・能力をお書きください。

□ 運営指導委員（敬称略）

上智大学	総合人間科学部	教授	奈 須 正 裕
文部科学省	国立教育政策研究所	総括研究官	福 本 徹
山口大学	教育学部	教授 副学部長	松 田 信 夫
山口大学	教職大学院	教授	静 屋 智
山口大学	教育学部	准教授	阿 濱 茂 樹
周南市立德山小学校		校長	酒 匂 昌 二 郎
山口大学	教育学部附属山口小学校	P T A 会 長	山 下 鉄 旨

□ 研究支援委員（敬称略）

山口大学	教育学部	准教授	阿 濱 茂 樹
山口大学	教育学部	准教授	沖 林 洋 平
山口大学	教育学部	准教授	西 尾 幸 一 郎
山口大学	教育学部	講師	鈴 木 宏
山口大学	教育学部	講師	田 本 正 一
山口大学	教育学部	講師	宮 木 秀 雄
山口大学	教職大学院	教授(特任)	前 田 昌 平
山口大学	教育学部教職センター	アドバイザー	浦 田 敏 明

□ 本校教員

校 長	岡 村 吉 永	副校長	富士本 武 明	主幹教諭	西 村 光 博
教務部長	寺 内 健	研究部長	森 重 孝 介○	生徒指導部長	原 田 圭 介
健康相談部長	岡 崎 典 子	総務部長	川 原 真 矢	教育実習部長	山 本 侑 子
	志 賀 直 美		岡 本 貴 裕		小 林 弘 典○
	大 賀 拓 也		木 村 将 士		重 枝 孝 明○
	森 戸 幹○				(○印は本年度研究部員)

□ 研究協力員

防府市立華城小学校	教諭	品 川 直 子
長門市立深川小学校	教諭	飯 田 将 之
長門市立油谷小学校	教諭	荒 川 正 造